
黒衣の剣士と和服メイドのオンライン戦記

ヴェンデッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒衣の剣士と和服メイドのオンライン戦記

【Nコード】

N3996Y

【作者名】

ヴェンデッタ

【あらすじ】

ワールドシェア一位を誇るVRMMORPG『ブレイブワールドオンライン』。その世界で戦い続ける黒衣のプレイヤーことニルヴァーナはある日1人のメイドと出会う。電子空間の中で戦う2人の物語、ここに開幕です！！

第0話 始まりの日（前書き）

初めまして、ヴェンデッタと言うものです。このたびは書き溜めていたオンラインゲームものの小説を投稿してみることになりました。設定や読み辛いところがあるかもしれませんが、応援の程よろしく願います。

では第1章開幕です！！

第0話 始まりの日

高校二年生である黒河裕介の学校内での評価は『頼りになるいい人』だった。相談には親身に答えてくれる、何かあった時は的確なアドバイスを送ってくれる、不得手教科はあるものの勉強も教えてくれる、それでいて過度に干渉してこない。まさしく『いい人』の鏡のような人物だった。だがそれは表向きの話、彼の実際の姿を見たらほとんどの人は幻滅する。なぜか？理由は恐ろしく単純明快だ。その理由とは・・・彼が重度のネットゲーマーだったからだ。

なぜ彼がここまで、この世界にハマってしまったのか、その理由は数ヶ月前、彼がオンラインゲームを始めたところまでまで遡る・・・。

数ヶ月前 帝都『ルスラ・ウィルド』

2016年現在、全世界で5000万人以上がプレイしているVRリアリティRMMO（マッシュブリー・マルチプレイヤー・オンライン≒RPG、仮想現実空間で自分がまるでその世界で戦うというネットゲーマー達の夢をかなえた究極のRPGにして、ワールドシェア1位のオンラインゲームがこの『ブレイブワールドオンライン』だ。ファンタジックな世界観に500種類以上の武器防具、様々な職業にモンスター、そして戦闘以外にも鍛冶や裁縫、釣りや料理、音楽などが多数用意され、ゲーム内で生活することができるというところが好評を博している。

BWOのサービスが始まったときから存在するというレイヴェア大陸にある国家、オルテンシア帝国の首都『始まりの街』こと帝都ルスラ・ウィルドはいつも賑やかだ。初心者はいいていこの街を拠

点にしているので、それに合わせて自然と人も集まってくる。アイテムショップや鍛冶屋も店を広げている。その中でも多くの店が軒を連ねるメインストリートを一人の青年にして、裕介のこの世界の分身でもあるキャラクター・・・ニルヴァーナが歩いていた。彼の職業は大剣士、パーティーの前衛職の中では2番目に人気の職業だ。装備は白いシャツにレザー系の防具を装備している。背中に装備しているのはレベル10から装備できる大剣、バスターブレイズを装備、服装も装備もまだまだ未熟な典型的なBWOルーキーの一人だった。現在のレベルは11、まだまだ新人に毛が生えた程度で、今はミツシヨンの終了報告を終えてきたところだ。

簡単だった割に意外と報酬が多いスカルフラワー討伐は彼にとってもいい稼ぎ口でもある。生産系スキルを上げるつもりはないので武器の素材になるもの以外は街にあるNPCの道具屋に売ってこのゲーム内の通貨であるVに換金する。^{ヴァニラ}

「ねえ、あんた、初心者だよね」

再び経験値を稼ぎにフィールドに出ようとした時、後ろから声を掛けられた。振り返ると、そこに立っているのは男女の二人組、男の方は片手剣使いで、女の方は彼と同じく大剣使いだった。装備から見るにおそらくレベルは20代後半か30代くらいだろうと彼は推測した。

「そうですけど……どうかしました?」

「いや、ここからちょっと行ったところに経験値をガンガン稼げるフィールドがあるのよ。どう、行ってみる?」

女の方が彼に尋ねてきた。レベルは可能な限りあげておきたいので、素直に誘いに乗ることにした。

「じゃあ、お願いします」

「堅い堅い、もっと気楽に行こうよ。私はカルラ。よろしくね」

「俺はレイズだ。よろしくな」

「ニルヴァーナです、よろしく」

こうして三人は街を出た。だが、この判断こそが後に重大な過ちを招くことになるなど当時の彼は予想だにしていなかった。

第0話 始まりの日（後書き）

では感想をお待ちしております！！

第0. 5話 初心者狩り（前書き）

第一話が始まってすらいなのに戦闘シーンってどうなのさ・・・？

第0. 5話 初心者狩り

帝都からしばらく行ったところにある広大な森林地帯、ここは基本的にレベル20近くのモンスターが多く出現するところである有名な場所、ここをクリアできるようになったとき初めて初心者から半人前になる。

「はあっ！」

バスターブレイズから繰り出された一撃がスライムに直撃する。スライムがポリゴンのかけらとなって消失するのを見届けると、彼のレベルは16になっていた。

「はー、さっき狩り始めたばかりだったのに、もう16なんだ、成長速いねー」

「そんなことないですよ。これも二人のおかげですって」

そう言ってニルヴァーナが笑う。ここでの戦いはまずカルラとレイズが出てきたモンスターのHPをある程度まで削ったところでニルヴァーナとスイッチしてそのまま彼が止めを差すという戦法をとっていた。街から持ってきていたポーションもさっきから減っていなかった。レベルアップ時のボーナスポイントを筋力値と体力値に割り振る。

BWのステータスには、基礎となる6つのステータスと、基礎ステータスというものが存在する。筋力^{STR}、敏捷^{AGI}、体力^{VIT}、魔力容量^{INT}、DEX^{DEX}、LUK^{LUK}、運の6つで、これらを割り振って自分のキャラクターを構成

していくのだ。ニルヴァーナは大剣士型によくあるSTRとVITにポイントを割り振っているがそれ以外のAGIやINTも強化している。ソロプレイでは大抵のことを一人でこなさないといけないため、ある程度バランスよくステータスを上げている。

「じゃ、あそこがこのフィールドの目的地だよ」

カルラが指さした先にあったのは古い神殿だった。今は植物の蔓が柱に巻き付いて自然に帰ろうとしている。その神殿の中を3人が歩いていく。この神殿はモンスターが出現しないはずなのだが・・・後ろの二人が剣を抜いた。そしてカルラが手に持っていた大剣をニルヴァーナへと振り下ろす。間一髪でそれについた彼は二人の方に向き直る。

「何の真似ですか、これは」

二人はニヤニヤしたまま何も答えない。だが、その笑顔には確かな悪意が混じっていた。罠に掛かった獲物をバカにするような類の笑いだ。

「まったく、見事に掛かってくれちゃって、ほんつとに笑えるわね！」

「で、カルラ。どうする？この前は俺がやったから今日はお前の番だぜ」

「OK、じゃ、今日は遠慮無く狩らせてもらおうわよ。これだから初心者狩りは止められないのよね♪」

再び大剣を構えてカルラが突進してくる。ニルヴァーナも剣を構えた、PCに向けるのは初めてだが、迷っている暇はない、剣を抜いて戦わないと自分がやられてしまう。

「ふーん、やる気なんだ」

カルラが大剣を振るう、剣の性能とそれを使うカルラの能力によって剣は絶大な威力を持って彼に迫る。一撃目は回避、二撃目はバスターブレイズで防ぐ。大剣同士が弾きあって盛大に火花が散った。大きくのけぞったカルラにバスターブレイズの一撃を叩き込む。大きくカルラが吹き飛ばされたがHPはほとんど削れていなかった。相手は30代、対するこっちは16なのだからまともにやり合って勝てるはずがない。

「よくもやってくれたね……」

忌々しそうにカルラがいう。レイズが手に片手剣を持った。どうやら静観する気がなくなったらしい。

「適当に痛めつけるだけにしようと思ってたけど気が変わった。こいつは徹底的に殲殺す……」

「俺も手伝うぜ」

二対一というあまり喜べない状況になってしまった。カルラが大剣で斬りかかってくると同時に時間差でレイズも片手剣で斬りかかる。カルラの攻撃を何とかやり過ごした後でレイズの片手剣を弾く、レイズが片手剣スキル《風牙》を繰り出した。風のように衝撃波を飛ばしてくる片手剣スキルでは割と初期の技だ。

何とかニルヴァーナが反応するがバスターブレイズのガードが間

に合わない、まともに食らって神殿の床に叩き付けられる。起き上がろうとしたところでカルラの大剣が迫る。起き上がった姿勢でカルラの斬撃をガード、右足でカルラを蹴飛ばして彼女の体勢を崩す。立ち上がって後ろに距離を取る。サイドポーチからポーションの入った瓶を取り出してそれを飲み干した。黄色になっていたHPバーが緑へと戻る。

「そらそらそらあっつ!!」

レイズが連撃でソードスキルを放つ、そしてカルラが前に出てきた。大剣のソードスキルのモーションに入るよりも速くニルヴァーナが大剣士の初期スキルのひとつ《スラスト》を放った。巨大な空気の刃がスキル発動中のカルラに迫る。彼女がそれに気付く気が付くが既にもう遅い、バスターブレイズの一撃がカルラのHPバーを削った。

「カルラ！」

レイズが相棒であるカルラに声を掛けたその隙を見計らって彼は逃走した。神殿さえ出れば、後はモンスターを避けつつ街に帰ればいい。そう思った直後、一気に距離を詰めたレイズがソードスキル《ガルウェータ》を繰り出した。衝撃波が地面を伝ってニルヴァーナに命中する。大剣を仕舞っていたのでガードすることすらままならずHPを大きく削られた。

「倒したと思ってんのかよ」

レイズの嘲笑、再びバスターブレイズを抜いてレイズと斬り合う。だが相手は片手剣、手数が多さから見れば相手の方が多い。次第にHPを削られ、いよいよレッドゾーンへと突入した。まともに回復

する間なんてない。

そして・・・復活したカルラとレイズが同時にスキルを発動させた。レイズのスキルが彼の持っていたバスターブレイズを砕く、連戦で武器耐久度が限界に達したのだ。そしてポリゴンの欠片となつて消えた武器を気にするまもなくカルラが迫る。そこで、彼のHPは0になった。フィールドの中でHPが0になったときは最後にセーブした街の前に戻される、いわゆる死に戻りというやつだ。こうして彼は一つ学んだ。この世界には悪意を持ったプレイヤーもいるということ。

ルスラ・ウィルド 13…22

このBWOでは天候が固定されているフィールド以外は常に天気が変わる。今のルスラ・ウィルドは曇っていた。『死に戻り』をして、ルスラ・ウィルドの城壁の前に立つ、背中には武器は背負っていない。そのまま門をくぐり、メインストリートを歩いているといつの間にか雨が降り始めた。雨の中を歩いていくニルヴァーナ。彼にとって幸運だったのはある程度の蓄えがあったことだった、もちろんあの神殿でドロップしたアイテムもあるが、レア度があまり高くなかったため、それほど被害は酷くはなかった。

いつの間にか彼はメインストリートからプレイヤーメイドの店が軒を連ねる通りに入っていた。この地区では鍛冶スキルを上げたプレイヤー達が様々な武器を製造している。

今の彼の中にあるのはただひたすらにレベルを上げることだった。何よりレベルが足りなければ自分の身をまともに守ることすら出来ない。今回の一件で彼はそれを痛感したのだ。

(ま、とりあえず武器だな……)

雨が降っている通りを歩いていると、気になる店を見つけた。店の名前は『ヴォルテンの武器工房』ニルヴァーナ自身も何度か酒場で話していたプレイヤー達の噂で聞いたことがある名前だった。

その店が専門に製造しているのは複合武器・・・いくつかの武器を合体させて作り上げた武器を専門に売っている店で、店の前に張ってあるチラシには閉店セールと大きく書かれていた。どうやら店を移すために残っていた武器や鎧の安売りをしているらしい。店の中に陳列されている商品は基本的な武器以外全てが売れ残っていた。どうやらこの街ではあまり複合武器の需要はないらしい。

そんな中に彼の気を引く武器があった。一見すると大剣のように見えるが、実際は柄が5つに分離して鎖鎌のような形態に変形するという複合武器だった。どうやら噂は本当のようだった。値段は・・・今持っている素材アイテムを全て売却して貯金していたVと合わせれば買える値段だった。

「すみません、あの剣買いたいんですけど……」

店主にVを渡す、彼はこうして新たな剣を手にした、その新たな剣の名前は・・・『フォービドゥン』。

第0. 5話 初心者狩り（後書き）

戦闘描写に関する指摘や感想お待ちしております。それでは。

第1話 金を取り戻せ（前編）（前書き）

感想こないなあ・・・

第1話 金を取り戻せ（前編）

初めてのPKから一ヶ月後、ニルヴァーナのレベルは35になっていた。毎日狂ったように経験値を稼ぎ、信じられない速度でレベルアップしていった。最近はいつも振っている愛用の大剣も重く感じなくなった、だが背負っている大剣・・・フォービドゥンは刃こぼれが目立ち始めている。ここのところ大型モンスターとの戦闘を重ねたためガタが来つつあるのだ。武器の耐久値も危険な領域に差し掛かっている証拠だ。

（でもなあ……）

この剣は複合武器である特性上早々メンテナンスに出せない。出せない最大の理由は、武器には専用の整備スキルというのが存在する、例えば片手剣なら片手剣整備のスキルを持っていれば自由に修復できるのだ。だが、このスキルを取得するためには多くの武器を見たり、鑑定しないと取得できないので、基本的には鍛冶屋に一任されてしまう。だが、三日前から彼が拠点としている街、魔術都市ダンテローザには複合武器整備のスキルを持つ鍛冶屋がいないのだ。これでは修理しようにも修理が出来ない。このままだと耐久値がゼロになってしまう可能性だってゼロとはいえない。レベルアップしなければならぬときに武器の限界が迫りつつある・・・これは痛かった。

（真剣にどうしたものか……）

そんなことを考えつつ中央の噴水広場で屋台で買ったホットドックを食べながらニュースウインドウを開いてBWOワールドニュー

スの記事を読んでいると、彼のそばに栗色のツインテール少女がやってきてプラカードを出した。プラカードには大きな文字でこう書かれていた。

『店の資金を奪われました。お願いです、お金を取り戻すのを手伝ってください』

そのプラカードを見て数人のプレイヤーが笑っている。どうやら彼がここに来る前からこうしてここに立っているらしい。服装は女の子らしい服の上にポケットがたくさんついたエプロンを着ている。ポケットには梶氏がよく使うハンマーや砥石などの道具が入っていた。ダメ元で声を掛けてみる。

「なあ、あんた見たところ鍛冶屋だから聞くけど……複合武器整備のスキル持っていたりしないか？」

「え？複合武器整備……ですか？一応所得してますけど……それがどうかしました？」

「俺の使ってる武器の整備をしてくれるっていうのなら……その依頼受けてやらんこともない」

「え、ホントですか！？ありがとうございます！！！」

どんな反応をするか確かめるために声をかけたはずだったが、少女があまりにも嬉しそうにいうのでいつの間にか断れない空気になってしまった。仕方なく話を聞いてみることにする。

栗色ツインテール少女の名前はシーナ、つい最近まで路上で武器整備や自作武器の販売を重ねてようやく店を持てるだけの資金が貯まったのだが、それを三日前フィールドで素材の採掘をして帰る途

中でこのダンテローザの町周辺を狩り場に行っている『ドレッド』と呼ばれるPK集団に根こそぎ奪われてしまったのだ。

「……で、今まであそこに立ってたってわけか」

噴水の近くにあったベンチに座りながら彼はシーナの話聞き終えた。

「はい、せっかく念願の店が持てるって思ってたのに……」

再び泣き出しそうになるシーナを宥める。

「ああ、分かった分かった。手伝うから泣かないで」

泣く直前で何とか押しとどめてから行動を開始する。ドレッドと呼ばれるグループはおそらく全員がレベル20後半か30程だろう。さすがに一人で相手にするのはしんどいので助けを借りることにする。二人が歩いてダンテローザの街から少し出たところにある小さな小屋へと向かった、台風でも来ればすぐにでも吹き飛んでしまうのではないかと思うほどボロボロの小屋だった。

「ここに誰かいるんですか？」

「最近一緒に狩りに行ってる俺の知り合いがここで住んでるはずなんだが……おい、樁、いるんだろ。居留守を使うなよ……」

しばらく呼びかけていると小屋の扉が開いた。そこに立っていたのは鼻の上に大きな切り傷のある長身の男だった。髪はバンダナらしき布で後ろにまとめてある。黒地に炎を模したデザインの着物をだらしなく着た落ちぶれた侍のような風体の男で少し長めの刀腰に

差している。

「何の用だニル」

「ようやく出てきたな……久しぶりにP K狩りに行こうぜ」

「……オーライ、話を聞かせてくれ」

ニルヴァーナ『P K狩り』の一言で椿と呼ばれた男がけだるげな表情から一転、好戦的な表情に切り替わる。エンジンがかかってきたところで簡単な事のあらましをシーナから話してもらう。

「O K O K、話は大体解った。つまるところその……ドレッドだっけ。そいつらから奪われた店の購入資金を取り返しゃいいんだな？」

「は、はい、そうです」

若干びくびくしているシーナが椿にそう答える。

「ま、そんなところだ。どうする？」

「やるに決まってるんだろ。じゃ、準備してくるわ」

そう言って奥の方に入っていく椿。ニルヴァーナとシーナは先に装備を整えて外で待つことにした。

「あの椿って人……強いんですか？」

どうやら自信がないのかシーナが彼に尋ねた。

「あいつの職業は侍、しかも流行りの二刀流なんだが、武器が独特なんだよ」

「確か……持ってたのは二つとも大刀でしたね」

「よく見てるな、さすがは鍛冶屋」

侍は基本的に刀を使う、そして二刀流侍は基本的に右手に通常の刀、もう片方の手には短い脇差しを持つ。攻撃のパターンとしては脇差しで受け流すなり弾いて、そこから反撃につなげるのだが、椿が使うのは扱いが難しいということで侍でもあまり使わない大刀を使っている、それも両手にだ。

「あいつは俺の知ってる侍の中じゃ最強クラスだ。だから大丈夫だろう」

そう締めくくると同時に椿が小屋から出てきた。

「準備は出来たか？」

「ああ、んじゃ、仕事にでも行ってみようかね」

ゴキゴキを首を左右に動かして椿が小屋から出てくる。こうして、シーナの店舗購入資金奪還作戦が始まった。

第1話 金を取り戻せ（前編）（後書き）

では、感想お待ちしております。

第2話 金を取り戻せ（後編）（前書き）

ちよつと戦闘描写がイマイチかもしれない・・・

第2話 金を取り戻せ（後編）

椿が住んでいる小屋から出て、三人はダンテローザの街へと向かう。早速街で聞き込みをしてみるとすぐにドレッドの情報が集まった。随分派手に行動しているようで、あちこちから情報が集まってきた、彼らの行動には自警団ギルドも前から警戒はしていたらしいが、レベルがそれほど高くないのと、装備の面で圧倒的に不利なので手が出せない状態だった。

集まった情報を統合して考えるとどうやら街の周辺に複数ある拠点を転々と移動し、ルスラ・ウィルドの方向から来る、自分達よりレベルの低いパーティーを襲っているようだった。

「こちら辺で待ち伏せ出来る場所は限られてるから、すぐに見つかるだろう」

椿が何でもないかのようにサラリと言ったのけた。それから数時間交代で見張りを続けていると・・・本当にドレッドの面々が現れた。狙っているのはおそらくレベル20代のパーティー、今か今かと獲物を待ちかまえている背後から二人がふらりと現れた。

「よう、ドレッドの皆様」

「ちょっとお話ししようかねえ？」

そう言っって悪魔のように二人がニヤツと笑うとドレッドの四人は逃げようとするが、それよりも速く二人が武器を抜いた。ここで逃げだせばPKギルドとしてのメンツが立たない・・・おそらくそう判断したのだろう。

「ちっ、やるしかねえか……」

リーダーらしき男が片手剣を抜いたと同時に他のメンバーも武器を抜いた。ランス使いが一人、双剣使いが一人、魔術師が一人という編成だ。相手のレベルは32、ぎりぎり勝てるか勝てないかの瀬戸際だ。

「それじゃあ行くぜえっつっ!!」

一人目の双剣使いが勢いよく突進してきた。狙いもつけずに剣を振り回すが冷静に避けてニルヴァーナがフォービドゥンを持つ。双剣士に向けて大剣スキル《スラスト》三連撃、高速で放たれた斬撃三発の内二発が直撃して双剣士のHPを大きく削る。残りの一撃は避けられた。瞬時に柄を分離させる。柄の中から鎖が出てきて多節棍形態に変形した5つに別れた柄の一つを持って多節棍用スキル《列颯》を放つ。鎖が双剣士に巻き付いてHPバーを減らす。そこでフォービドゥンを手放して片手に3つずつ、計6本の投げナイフを投げた。全部のナイフが双剣士に突き刺さってHPをゼロにする。ポリゴンの欠片を散らしながら双剣士が消滅した。

「椿! そっちはどうだ!!」

「無事に片付いたぜ!!」

声のする方を見ると槍使いと片手剣使いがいなくなっていた。地面には彼らが装備していた片手剣と両手槍が転がっていた。レベル差はそれほど無かったはずなのだがあっさり倒している。

「てめえらっつっ!!」

リーダーの片手剣使いがニルヴァーナに迫り来る。かつて、自分をPKしたレイズも片手剣使いだったが今はあるときとは状況もレベルも、何よりニルヴァーナ自身が大きく変わっていたため、難なく反撃に転じた。残っていた投げナイフを投げる。片手剣使いのリーダーがそれを弾いている隙にフォービドゥンの柄を掴んで引き寄せる。時間はわずか一瞬、だがその一瞬が全てを決める、柄同士をつなぐ鎖の音を響かせて彼が剣を引き寄せる。5つある内の刀身と合体している柄を持ってどレッドのリーダーに投げた。リーダーの男は何が起きたのかを理解する前に地面に倒れ伏した。そこで縄を持って待機していたシーナがリーダーを縛り上げる。こうして、PK討伐戦は幕を下ろした。

16・34 ダンテローザ中央広場

あの後、縛り上げたレッドのリーダーの話によると奪ったシーナの店の代金は半分を上部ギルドに上納、残りは自分達の武器代として消えてしまったというので、ドロップして転がっていた武器を片っ端から集めて売ったがさすがに全額を取り戻すことは出来なかった。

「すまん、取り戻せなかった」

日が傾いてきた街の噴水の前で少女に頭を下げる男二人・・・端から見れば何があったのか気になるころだ。だが当のシーナは嬉しそうだった。

「そんなに気にしないでください。半額取り戻せただけでも充分ですよ」

「しっかしなあ……」

椿はまだ納得できないらしい。意外と律儀な奴なのだ。気にしないでと続けながらシーナが言葉を続ける。

「私、また路上で武器を売りながらお金を貯めようかと思ってます。今回取り戻せたVで新しい機材は買えますし、もうちょっといろんな世界を見て回ろうかなって」

シーナがそう言って二人に負けないくらい深々と礼をする。その時、椿が何かをひらめいた顔になった。

「なあ、嬢ちゃん。ものは相談なんだが俺の家を間借りしながら武器屋をやるってのはどうだ。最近料理スキルを上げる機会があつて、ちょうどいいからあの小屋で茶店でもやろうかなって思うんだが、そこに武器屋があれば客も寄ってくるんじゃないか……って思っena。どうだ？」

椿の思わぬ提案に二人が啞然となるがしばらくすると二人が笑い始めた。

「ご迷惑でなければ……お願いします!!」

「おうよ、交渉成立だな!」

面白そうに椿が言った。

「あ、それと、ニルヴァーナさん。武器の整備をして欲しかったんですよね」

「そうだな、出来るか？」

「はい、数日でもしたら完全に元に戻ってますよ！」

こうして、シーナは椿の小屋を間借りして店を開き、ニルヴァーナは無事にフォービドウンの修理をすることが出来た。

それから三日後、ニルヴァーナが街を出て行く。次の新しい拠点となる街に移動するためだ。街の外には椿とシーナが見送りに立っていた。

「またなんかあったら来いよ」

「武器の整備をしたくなったらまた来てくださいね！ありがとうございます！！」

「二人とも元気だなー」

そんなあいさつを交わしてニルヴァーナは新たな街へと向けて歩き始めた。

第2話 金を取り戻せ（後編）（後書き）

では、感想お待ちしております・・・というよりもすごく切実なお願いです。感想を待っております。

第3話 黒猫騎士団（前書き）

ここから暫く戦闘シーンはありませんのでご容赦のほどを・・・。

第3話 黒猫騎士団

イレーディア森林保護区 13…44

遠くでは雷を伴った雨が降っている。針葉樹林が鬱蒼と広がる森の中をニルヴァーナは歩いていった。現在、彼のレベルは41。拠点にしているのはダンテローザから北上して、森の中にひっそりと存在している村『ロレイシア』を拠点としていた。服装は麻のシャツの上にダークグレーのベスト、ダークグレーのズボンに黒いブーツ、そして茶色のハーフコートを着ていた。

今日は森の奥にある洞窟でフォービドウンの強化用素材を取りに行った。ニルヴァーナには苦手な場所がある。それが森や雪原で、こういう音が反響しそうな森や、音を吸い込む雪原を歩いていると自分が一人で行動していると再認識してしまう。ソロプレイだから仕方がないと言えば仕方がない。そんなことを思っていると、どこからか戦闘音が聞こえてきた。ここはいわゆる街道から外れているのでそれほど通行量は多くはない。来るとすれば素材の収集かレベルアップのどっちかだ。音を頼りに森の中を走っていくとすぐに見つかった。パーティーの人数は5人、相手はこの森でよく出てくるアイスウルフが4匹いた。

パーティーを組んでプレイしたことがあまりないニルヴァーナからみてもそのパーティーはずいぶん変則的な編成だった。前衛は盾を持った片手剣使いが一人だけ、あとは両手槍を持った二人と魔術師が一人、僧侶が一人だけだった。あれでは前衛とスイッチする要員がいらないためズルズル後退してしまうパターンだ。

見殺しにするのも気が引けるので彼は背中に背負っているフォービドゥンを抜いた。そのまま隠れていた茂みから飛び出してアイスウルフに切りかかった。このフィールドのモンスターの平均レベルは25、今のニルヴァーナなら難なく狩れる。フォービドゥンをHPの減りつつあったアイスウルフに叩きつける。まず一匹目、鎖鎌形態に変形させてまとめて二匹のHPを削る。そこで回復を済ませていた片手剣使いとスイッチ、片手剣と槍の攻撃を立て続けに受けてアイスウルフ二匹がポリゴンの欠片を散らした。残る一匹はある程度HPが減っていたので彼らに任せることにした。最後のアイスウルフがポリゴンの欠片となって砕け散ったとき、5人組は盛大に歓声を上げた、互いにハイタッチを交わしている。数人がニルヴァーナともハイタッチを交わした。今までかなりの数のパーティーを見てきたがここまで喜んでいるパーティーを見るのは初めてだった。

「ありがとうございます、ここで狩りをしてらしたんですか？」

リーダーと思われる片手剣使いが話しかけてきた。

「ええ、武器の強化用素材を集めている最中でして……そちらに被害はありませんでした？」

「特にはありませんね。それと……勝手なお願いかも知れませんがレヴィーサまで護衛を頼んでも大丈夫ですか？」

「どうやら彼らはこの森の先にある港町レヴィーサに向かう途中だったらしい。」

「ちょうど自分も拠点を移そうかなと思っていました。そっちが良ければご同行いたします。あ、おれの名前はニルヴァーナ、呼び捨てにしてくださいでもかまいません」

「わかった、僕の名前はクレインだ。よろしく、ニルヴァーナ」

そう言って二人が握手した。それからの道中は穏やかなものでモンスターに遭遇するわけでもなく、順調な旅が続いた。レヴィーサに着く直前クレインが再び彼に話しかけた。

「なあ、君が良ければいいんだけど、僕たちのパーティに加わってもらえないかな？別にニルが嫌だったら強制はしないんだけど、このパーティーって前衛があまりいないからね」

クレインの言葉に彼は珍しく迷った。いつもならあっさりと跳ねのけてしまうのだが、なぜか迷ってしまう。結局彼が出した答えは・
・・・・・。

「反対意見がないなら加わらせてもらおうよ」

「ありがとう、ニル。みんなー、今から彼が新しく入るけど、反対意見とかないよねー」

クレインがメンバーに尋ねてみる。新しい仲間が増えたのが嬉しいのか、このギルド・・・『黒猫騎士団』の面々は盛大にニルヴァーナのパーティー加入を歓迎してくれた。メンバーの名前は長槍使いガ

リーナとカケル、魔術師がリスト、僧侶がナインという名前だった。

「じゃあ、よろしく」

レヴィーサは北の海に面した港町で海には水が張っている。街にいるNPC達の服装もどこか北国を連想させる。

「今日は僕たちここで落ちるけど、明日からは……僕も含めた全員
のレベル上げかな。ニルも手伝って貰うことになるけど、大丈夫？」

「ああ、俺もレベルアップしときたいからな。それじゃお疲れ」

「うん、よろしく。それじゃあ」

そう言っ
てクレイン達
が宿屋の方
に向かって
歩いていく
。それを
見送った
ニルヴァー
ナは再び森
の方に向か
って歩き出
した。だが
彼の顔はレ
ベル上げに
いそしんで
いた頃の彼
と違い、今
までになく
輝いていた
という。こ
うして彼は
正式にクレ
イン主催の
ギルド『黒
猫騎士団』
に入団した。

第3話 黒猫騎士団（後書き）

では感想お待ちしております。

第4話 転機（前書き）

戦闘シーンがありません、重ね重ねご容赦のほどを・・・！

第4話 転機

それから数週間、ニルヴァーナがパーティーに加入して以降、黒猫騎士団の戦力は大幅に上昇した。これはメンバー全員が予想外だったらしく、そのことを盛大に祝ったりもした。そして、黒猫騎士団にあるギルドが声を掛ける。ギルド名『碧衣の旅団』前衛職と後衛職のバランスが釣り合っている理想的なギルドだが、最近は脱退者が増加し、新規入団者が減っているという。そこで焦った幹部の連中は外部から新しい入団者を増やした。その中の一つに黒猫騎士団の名前が入っていたのである。そして黒猫騎士団が碧衣の旅団の傘下にはいつてから数週間後、事件は起きた。

その日、黒猫騎士団がいつものように街の外に出ようとする。団長であるジェスがもう一つのパーティーを連れて行って欲しいと頼んできた。連れて行く相手は旅団の中でも悪名高い『我仨お嬢様』ミルティだった。愛らしい外見を武器に彼女は団内の立場を瞬く間に築き上げる。レベルもそこそこあるのだが、戦闘するのはいつも彼女の取り巻きで、ハッキリ言ってしまうえばレベルに対し実力が恐ろしいほど伴っていないのだ。

「ふーん、あんた達が今日のあたしの護衛なんだ。ま、せいぜい盾としての役割は果たしてもらおうわよ」

あいさつもなしにいきなり高圧的な態度でそう告げてきたミルティに一度は全員が依頼を放棄しようとしたが団長であるジェスがそれを許可しなかった。彼自身もミルティのファンだったため、誰も彼女の横暴を止められなかった。彼女の我が儘っぷりに付き合いきれず徐々に『碧衣の旅団』は力を失っていく。

最後のアーマードゴブリンの一団がニルヴァーナとクレインの連携攻撃によって倒される。クエスト目標であるアーマードゴブリン五十体の討伐クエストが無事に終了した。

結果からいえばその日の狩りは散々だった。黒猫騎士団が苦戦しているときでも、ミルティとその取り巻き達は回復ひとつせずに傍観しているだけだった。かといえ、アイテムを分配するときになると会話の中に入り込んできて……。

「あんたらのくっだらなレベルアップに付き合ってあげたんだから。アイテムは当然私たちが多くもらえるのよね。感謝しなさいよ。ミルティ様のおかげで今日も無事にレベルアップできましたって。ほら、言いなさいよ」

その場合はニルヴァーナが強引に納めることに成功したが、余りの身勝手さに一度は退団も考えた。だが一部の良識的な幹部達の頼みを断ることは出来ず、ずるずるとそのまま在籍し続けることになった。だが、それが決定的な間違いだったと気付いたときには全てが遅くなっていた。

その時からニルヴァーナは黒猫騎士団と離れて行動するようになっていた。ミッシェンも黒猫騎士団のメンバー以外と行くようになり、そうなってくると互いの会話も疎遠になってくる、そして更なる事件が起きたのはある雨の日のことだった。

久しぶりに呼び出されて黒猫騎士団のメンバーの元にいてみると……全員が淀んだ目をしていた。どこか生気の欠けた瞳。原因を聞いてみると、きっかけは黒猫騎士団があるレア長槍を手に入れたことだった。通常なら騎士団にいる両手槍使いの二人の内で話し合いが行われるのだが、その日は運悪くミルティがついてきていた。もちろんミルティはその槍を寄越せという、その日は何とか引いた

もののその日以降、様々ないやがらせをしてくるようになった。リーナが一人でいるところを狙って取り巻き数十人で囲み、様々な罵詈雑言をぶつける、ある意味恐喝だ。団長にも相談したがまともに取り合ってもらえない。そして、余りのしつこさに心が折れてリーナが槍を渡すと、それをさも譲ってもらったかのように振る舞う。一度殴りかかったことがあったが取り巻きと団長にことごとく返り討ちにされ、彼らの心もまた折れかけようとしていたのだ。

だが、ニルヴァーナは彼らを慰めることしかできなかった。そしてそれが決定的な事件へとつながっていく。その翌日、ミルティが再び黒猫騎士団を呼び出した。その内容とはあるボスモンスターの攻略で、数日後に騎士団が攻略する予定だったのだが、情報が少ないということと黒猫騎士団に情報収集を命じたのだ。だがミルティ達の目的は別で、ボスモンスターにやられていく黒猫騎士団を笑うためだけの企画だったのだ。

その話をニルヴァーナが聞いたのは彼らが拠点を出発してから数時間後のこと、あわてて彼らの後を追って森の中に入っていく、そしてボスがいるエリアでは信じられないことが起こっていた。ミルティ達は高台のボスモンスターの攻撃が届かないところで本当に高みの見物をしていたのだ。取り巻きに守られながら黒猫騎士団がやられていく様子を見せ物のように楽しんでいる。そして・・・ニルヴァーナの前でリーナがポリゴンの欠片となり、相次いで黒猫騎士団のメンバーがやられていく。それを眺めながらミルティは大笑いしていた。そして・・・彼が来ていることに気がついたクレインが声を掛けようとした瞬間、クレインがポリゴンの欠片となった。目の前で、仲間が散っていくのを目の当たりにしたとき、ニルヴァーナの中で何かの鍵が弾けた。暗い獣が鎌首をもたげるような感覚、彼はフォービドゥンを背中から抜き放つと、目の前のボスモンスターに向けて歩き始めた。

数回死にかけて、自分の持っている回復アイテムを全て使い切り、HPバーも赤に突入し、武器の耐久度もほぼ限界に近くなっていたが、それでもニルヴァーナは勝った。ポリゴンを散らしてボスモンスターが消えると、そこにはボスが持っていた長大な大剣が刺さっていた。自分の身長を軽く超している。そこで後ろから拍手が聞こえた。

「ふーん、あんな奴らと仲良しこよしだったからあんたも大したことないって思ってたけどなかなかやるじゃない。じゃあその後ろに刺さってる剣を私に頂戴、そうすれば、あんたも私の取り巻きに加えてあげる。どう、いい話でしょ？」

ミルティがいつもと変わらず見下した態度でニルヴァーナに話しかける。だが、次の瞬間、ニルヴァーナは大剣を引き抜いてオブジエクト化、それをポーチに入れる。

「何のつもり？ あたしに逆らうとどうなるか、解ってるでしょ。あんたみたいなの一人退団させるなんてどうってことないのよ？」

「調子に乗るなよクソガキ、お前の特権振りがさなくても、こんなバカのご機嫌取りしかいないようなギルドなんざこっちから辞めてやる！」

そう言うと同時にニルヴァーナがポーチから何かを取り出した。一見すると巫女や魔術師が使う護符や御札のようにも見える。『転移の護符』このアイテムはあらかじめ設定しておいた目的地の近くまで転送するというものだ。まさかここで使うことになるとは思

もしなかったが今はこれがこれ以上ない最上の策に思えた。ミルティとその取り巻きが迫ってくる前に彼は光と共に姿を消す。空中に浮いていた護符はその直後に青白い炎とともに燃え尽きた。

ダンテローザ郊外 椿の小屋

外はしとしと雨が降っている、一時の掘っ立て小屋のような造りだった椿の小屋は現在、時代劇に登場するような茶屋になっていた。一応簡単な料理スキルを持っている椿は茶屋その他のお菓子を作ることなどたやすい。だが、ここは鍛冶屋も兼ねていた。小屋の奥にはシーナ専用の工房がある。客はシーナが武器の整備している間の空き時間を椿が作った茶をすすったり、雑談しながら過ごす。最近では整備の質と茶の美味さから固定客がつくようになっていた。店の売れ行きも順調だ。

「雨ですね……」

「雨だな……」

軒先の長椅子に座って二人が曇天の空を見上げる。周囲には誰もいない、雨の音だけが静かに響いていた。

「あ、椿さん。あれって……」

「お、ニルじゃねえか……ってあいつどうしたんだ？」

雨の中を歩いてくる彼の姿は心なしかいつもより沈んでいるように見えた。

「よう、どうしたんだ？」

「……椿か、ちょっとな。いろいろあった……シーナ、大剣の刀身をこれに移植することは出来るか？」

そう言って背に装備していたフォービドゥンを指さす。

「出来るけど……どうしたの？」

不安そうにシーナが尋ねる。

「ちょっとやっておこうと思ってな。頼めるか？代金は……いくらだ」

「今回だけはタダにしておくから、ゆっくり休んで……ね」

シーナがそう言うのと奥の工房へと向かう。

それを眺めながら、彼は長椅子に腰掛けた。

「何があったんだよ」

「……何でもねーよ、気にするな」

そう言って気弱に笑うニルヴァーナ。

「そうかい」

そう言って雨が降り続く空を見上げる二人。工房の準備が出来る

まで二人の間に会話は一切なかった。

シーナに渡した身の丈以上の大剣『ルミナリア』の刀身の移植は成功し、前に使っていたものより遙かに強化されていた。その刀身は青白く輝いている。こうなってくると重さのせいで剣が振れなくなるためシーナに頼んで簡単な術式を刻む。今回使用したのは重量減少50%の術式、これだけでいぶ楽に振れるはずだ。

「あれ、ニルヴァーナさんは？」

「なんか街の方に服を取りに行くってさっき出てった……そろそろ戻ってくる頃だとは思うんだが……お、戻ってきた」

椿が外を眺めているとニルヴァーナが戻ってきた。だがその服は行く前とは違い黒一色でまとめられている。シャツまで真っ黒のスーツの上に真っ黒なロングコート、そしてロングブーツも金属パーツ以外は黒だった。腰の部分にはコートの上からベルトが巻かれている。

「出来てるか？」

「ああ、出来てるんだが……お前、その格好はどういうことだ？」

「これか。簡単に言ってしまうえばアレだ。決意表明って奴だな」

そう言って工房の方へと入っていくニルヴァーナ。工房から剣を持って出てきた彼はもはや以前の彼とは別人だった。

「それじゃあな」

そう言って、ニルヴァーナは雨の中を歩き始めた、決して振り返ることなく、静かに歩き始めた。

この直後、BWOは大きく方針を転換する。カテゴリーも中世ファンタジーの世界から、現代ファンタジーへ、それと同時に様々な追加要素を加えた大規模なアップデートが行われた。このアップデートで新たに加わったのは、空中都市や戦闘用に開発された魔導アーマー、新大陸などが目玉となっている。それ以外にもアイテムや装備が更新され、新しい武器や設備、職業などが作られた。そしてそれは新たなBWOの幕開けでもあった。今回のアップデートにより新規プレイヤーが大幅に増え、BWOは更なる盛り上がりを見せ始める。

第4話 転機（後書き）

今回からニルヴァーナが着ている服は簡単に言ってしまうえばF A T E／Z E R Oの切嗣の格好にいくつかパーツを加えたような感じ
です。次回以降は著アント戦闘描写もありますのでご安心下さい。
それでは、感想お待ちしております。

第5話 復讐三日前（前書き）

巨大兵器VS人って面白いですよ、ね、多分。

第5話 復讐三日前

アップデートから1ヶ月後 リヴェリナ大陸 ルヴェイラ森林保護
区 19…25

ダークブルーに染まりつつある森の上を3騎の魔導アーマーが飛翔する。今回のアップデートで加えられた新兵器の一つで、全長は5mほど。正式名称は『魔導アーマー』というが、ものすごく簡単にいってしまえば巨大ロボットだ。

単騎で複数の通常のプレイヤー達を圧倒できるスペックを持っている。この魔導アーマー、騎体名『スピットストーム』は『聖十字騎士団』所属機で、一定のレベルに達した精鋭だけで編成されている。左肩には同盟を結んでいる『碧衣の旅団』のエンブレムも描かれていた。

碧衣の旅団は現在、ミルティをアイドルとして担ぎ出した戦略が当たり、アップデート以降増えた、新規プレイヤーの確保に成功し、一応は解散の危機から脱出した。現在は再びBWO内で有名なギルドになりつつある。

この3騎は哨戒飛行中だったのだが、近くにいるギルドメンバーからの救援要請を受け現在はその要請があった場所へと向かっている最中だった。

『隊長、俺たち対空装備のままですよー』

『それに関しては心配ないだろ、何せこっちは魔導アーマーが3騎だ。相手が何であれ、余裕で勝てるさ』

『ですね……隊長、そろそろ目的地です』

通信をしつつも統率された動きで飛行する3騎の魔導アーマー。そして地上の救難信号発信地点に到着したとき……。

『この地点のはずなんだよな……?』

『はい、確かにこの地点で間違いないで……っ!』

次の瞬間3騎のコックピットにはレッドアラートが鳴り響いた。そして森の中から何十個もの小型の円盤が出てきて空中で爆発する。

『これは……! そんな、何故あの兵器がここに……!』

『どうした、何が起きてる……!』

『これは……重力地雷です! くそっ! 機体が動きません……!』
グラビティ・マイン

瞬く間に2騎のスピットストームが動かなくなった。そこへ地上を走り抜ける一人の男。その男は全身を黒い服で覆い尽くしていた。

『なんだ!?』

そして次の瞬間、男が背中に装備されていた長大な剣を抜く、そして、1騎目のスピットストームに剣を突き立てた。通常の術式や武器での貫通が困難とされている魔導アーマーの装甲を易々と貫通する。重力地雷の効果が切れるのと同時に3号騎の反応が消失。残りの2騎が空へと舞い上がる。

『3号騎がやられました。隊長、指示を……!』

『俺が先行してあの男を押さえるから、シンディは後から続け！行くぞ！！』

『了解！』

隊長騎が銃を格納して青白く光る接近戦用長剣を取り出した。地面を滑走しながら黒い男に迫る。普通のPCならば一瞬でHPを削るその攻撃を黒い男は大剣で弾き飛ばした、大剣と長剣が互いに弾き合い夜空に火花が飛び散った。

隊長騎が長剣を横から滑らせるが、これもまた大剣に弾かれる。基本的に魔導アーマーを倒せるのは魔導アーマーだけといわれてきた。何せ、自分より巨大で強大な相手と立ち向かうにはそれ相応の胆力が必要になる。そして大抵の場合はそんな胆力のない人間がほとんどだった。簡単に言うとな、目の前に大型トラックが走ってきたとき、ほとんどの場合、人は動くことが出来ない。隊長騎のの搭乗者はそう思っていた。

だが目の前の男は違う、魔導アーマーが出てきても動じるところか、大剣でまともに打ち合うほどだ。尋常ではない戦闘能力と精神力の賜物だと隊長騎のパイロットは思う。男が一度距離を取った、それを追って隊長騎が前へ出た。地面に長剣を叩き付ける。木が倒れ土埃が舞っている中で一時的にターゲットを見失ってしまった。そして再び警報が鳴った瞬間、隊長騎のパイロットは大きく機体を後退させた。そして、土煙の中から青白い刃が長剣ごと右腕を斬り飛ばした。すぐに上空に浮かびあがって他の場所で戦闘していた僚騎と合流する。

『シンディ！撤収だ！！』

『了解！！』

一度上空に上がってから別の場所で戦闘していた2号騎と合流する。それと同時に最大戦速で森林保護区を離れた。

「逃げられた……か」

そう言っただけの男……ニルヴァーナは空を見上げながらつぶやいた。ロングコートのポケットから煙草を取り出して火をつける。紫煙が夜空に踊った。現在彼の職業は『パラデイン』、レベルは59になっていた。この3ヶ月、ただひたすらにレベルを上げ、転職し、様々なスキルを身に付けた。今では格闘家の上位派生職のモンクのスキルも取得しているほか、攻撃術式に回復術式、錬金術もマスターしていた。彼のはめているオープンフィンガーグローブには錬成陣が刻まれている。そのほかにも索敵、追跡、軽業などのサブスキルも取得、ソロプレイヤーとしてある程度は有名になってきた。彼の職業でもあるパラデインは本来、防御力とHP量を生かした壁戦士だった。大型の重鎧を纏いモンスターの攻撃からパーティーを守りきる聖なる騎士。だが彼の場合は守る者ではなく、聖なる騎士どころか邪悪な騎士呼ばわりされても仕方のない戦いを行ってきた。というより姿からして騎士型職業には見えないだろう。

「そっちは終わったか？」

木の陰からもう一人男が出てきた。黒い髪を後ろでまとめ、片眼鏡^{クル}を掛けて、ニルヴァーナと同じように真っ黒な出で立ちの男だった。黒地に銀色のストライプが入ったシャツに黒光りする革製のベスト、黒のスラックスにブーツという出で立ちだ。あちこちにつけられた銀色のアクセサリが存在感をアップさせている。基本的にこういうアクセサリをつける奴はPK気取りか無頼者気取りと相場が決まっているのだが彼の場合はそうはならなかったらしい。貫禄が滲み出ている。

「ええ、無事に終わりましたよ師匠」

ニルヴァーナがそう、男に返した。彼の名はウォルター、ニルヴァーナの使う複合兵装の扱いのコツを教えた人物でもある。

「そうか、ならここから離れるぞ」

「了解」

聖十字騎士団本部 第3会議室

このBWOには様々な勢力が存在する。この聖十字騎士団もその勢力の一つでBWOのサービスが開始された直後から存在する勢力の一つだ。所属するプレイヤーは必ず支給される制服を着用していなければならないという決まりがある。それ以外は自由なギルドで新規入団者の育成も熱心に行われている。魔導アーマーの保有数はBWO内では2位という立ち位置だ。そのほかにもアップデートで追加された航空艦も大小30隻ほど保有している。

そんな聖十字騎士団の本部にある会議室では一人の女性が報告書をめくっていた。彼女の名はサビーナ、聖十字騎士団内では魔導アーマー隊の指揮官を務めている。ついさっき碧衣の旅団に派遣している魔導アーマー隊の指揮官から報告があった。ルヴェイラ森林保護区で、魔導アーマーとともに張り合った男がいたという。結果は3騎の内1騎が撃墜、1騎が小破という結果に終わった。気になったのはこの男、恐れることなく魔導アーマーと1対1で戦っているところだ。

「碧衣の旅団には悪いがこれは当たりを引いたかもな」

にやりと笑いながらサビーナは言った。今のところ聖十字騎士団と碧衣の旅団は同盟関係にあるが幹部の何人かはミルティの威光だけで成り立っているギルドとは同盟を破棄すべきという意見も出ている。

（とりあえずは様子見しておくかな……）

彼女がそんなことを考えながら会議室を後にする。

廃都イスラ・ウィルガ 10…34

BWOで最も高い山とされているのはレイヴェア大陸の中央部にある霊峰アルバ・シエスタ。その上に建てられているのが古代時代の廃都市である、イスラ・ウィルガだった。雲に包まれたその外見から空中都市とも呼ばれている。そんなイスラ・ウィルガの中を二人の男が歩いていく。通りの一番奥にある寂れた教会の中に入る。ステンドグラスから差し込む陽光が内部を照らしていた。既に席には数人のプレイヤーがいる。

「戻ってきたか、ウォルター、ニルヴァーナ」

「ああ、戻ったぞ」

最前列の席に座る男が二人に声を掛ける。彼の名はトーヴァート、『暁の大隊』で一応のまとめ役を務めている男だ。

「さて、二人が戻ってきたところで『茶会』を始めるぞ」

そう言うのとトーヴァートが目の前に通信用ウィンドウを開く。教会に集まっているメンバー全員が同時にウィンドウを開いた。

「ついさっき入った情報だが、碧衣の旅団が三日後に新しいグループを発表するそうだ。俺達はその発表中に碧衣の旅団本部を襲う。小細工無しの正面から殴り込みだ、各自盛大に暴れまくれ、以上」

簡潔に内容を話し終えるトーヴァート、それが終わると二人の女性プレイヤーがニルヴァーナのところにやってきた。一人はどこか抜けたおとなしそうな金髪の少女、もう一人は、眠そうな目に黒い髪で、両腕が機械の腕、通称『装甲腕』を装備した少女で、名前は金髪の少女がブリジットで黒髪の少女がルーナという。

「さっきトーヴァアが言ってた『碧衣の旅団』ってニルの古巣なんだよね？」

「……まあ、そうだな」

ブリジットが能天気な声で聞いてくる。

「……ためらいはないの？」

ブリジットとは対照的にルーナがおずおずと尋ねてくる。

「別に、復讐の機会が予定より早まっただけだ」

そう言うのにやりと笑うとブリジットが「わく悪役の笑い方だね」と言ったので適当に頭を小突く。この『暁の大隊』は流れ者やソロプレイヤーの寄り合い所帯で決してギルドというものではなかった。ニルヴァーナ自身もウォルターの紹介でここに来たようなものだった。全員が特殊職業や変わった戦い方をすることが特徴で、ブリジットは今回のアップデートで追加された魔術師系の上

位職『ダークビショップ』で、闇の魔術に特化している。ルーナの職業は騎士の上位職『アークナイト』、『クルセイダー』から進化した一つで、闇の魔術で強化されている。ウォルターの職業は盗賊の派生職業の一つ、『アサシン』本来は隠密行動で相手を倒したりするのだがウォルターの場合はこそこ隠れて攻撃せず、堂々と相手の目の前に出て、腰に差している軍刀二刀流で次々と相手を斬り伏せていくので最初は誰が見ても双剣士にしか思えない。実際『暁の大隊』メンバーもほぼ全員がそう思っていた。それでついた渾名が『忍ばない暗殺者』という怪しげな二つ名をもらうことになった。

「もうすぐニルはレベルアップだったよね？」

「あー、そうだな」

「私たちもレベル上げしたいから、狩りに行こう？」

ブリジットとルーナに両側を押さえられてしまった。こうなると後は従うしかない。三人でイスラ・ウィルガを離れる。その日の内にニルヴァーナのレベルはついに60代に突入した。

第5話 復讐三日前（後書き）

では、感想をガンガンお待ちしております。では次回もお楽しみに。

第6話 報復の日

三日後、『碧衣の旅団』の重大発表が行われている会場に向かつて5人のプレイヤーが歩いていった。今回の襲撃を担当するトーヴァー、ウォルター、ニルヴァーナ、ブリジット、ルーナの五人だ。会場ではマスコットであるミルティが演説をしている。どうやら新しいギルドに関する通達なのだそう。だが、次の瞬間に耳に入ってきた言葉は彼を怒らせかねないものだった。

「今夜、私はここに『黒猫騎士団』のギルドを立ち上げることを宣言しまーすっ！みんなーよろしくねー♪」

会場中から大歓声がわき起こる、壇上にいる『碧衣の旅団』旅団長のジェスもだ。あまりのことに今すぐ彼は飛び出しそうになった。かつての仲間達をあれだけ傷つけたというのに、まだ足りないというのか、まだ彼らから奪うというのか、怒りのあまり突撃しそうになるが・・・。

「落ち着け、ニルヴァーナ。冷静になるんだ、今はまだその時ではない」

「そーそー、もうちょっと盛り上がってからだね」

「落ち着いて、ニル」

三者三様の励ましのおかげで、彼は冷静な思考を取り戻す。壇上ではミルティによるコンサートが行われていた。会場のボルテージがどんどん高くなっていく。そして最高潮に達したとき、トーヴァ

ートが指示を出した。

「それでは始めるぞ。戦争開始だ」

その言葉と同時に全員が武器を持った。会場のあちこちから悲鳴が上がる。

「おい、この会場内は戦闘禁止…」

旅団のメンバーの一人が注意しようとしたが最後まで言い切ることなくその身体がポリゴンとなって砕け散った。トーヴァートが静かに言う。

「今から解禁だ」

異変に気がついたのか周囲の観客達が武器を持った。あこがれのミルティを守るためだろう。全くもって、度し難い、あの女に守るほどの価値があるとは思えない。どうせ、すぐにまた本性を晒す。そうになったら、またクレイン達の二の舞だ。

「ちょっと何なのよあんた達！私に武器を向けたらどういうことになるか教えてあげるわ、行きなさい下僕ども！！」

それと同時に会場に集まっていたプレイヤー達が武器を構え始める。ミルティが命令を下す直前、彼らが動いた。ブリジットが背中の翼を広げて空へ浮かび上がる、その翼には幾何学模様が刻まれていた、そして、幾何学模様が青白く輝き始める。それと同時に彼女の目の前に巨大な魔法陣が現れた。ハイウィザード達が集まってもなかなか発動させることの難しい大魔法の陣が少女一人によって行われていた、しかもその魔法陣が二つ、これがブリジットの二つ名

の由来でもある。『魔法爆撃機』、成功する確率が一桁という困難な術式を制御し、それを複数出現させ、何もかも焼き尽くすことからその渾名がついた。そして、彼女が杖を振ると同時に術式が解放される。下の四人に迫っていたプレイヤーが一瞬にして砕け散った。まさしく爆撃だ。尤も、あまりに広範囲すぎるのである程度距離をとっていないと自分達が攻撃されるというリスクが付いてくるのだが『暁の大隊』メンバーは意図を理解していたのでダメージを食らうことはなかった。

「ふ、ふん！そんな奴らの代わりなんていくらでもいるわ！でもこれならどうかしら？行きなさい、ケルベロス！！」

壇上の背後から三首の番犬が出てきた。数は3匹、何かの見せ物に使う予定だったのだろう。ミルティによって手なずけられている。

「そいつらを噛み殺しなさい！！」

三匹のケルベロスが一番近くにいたニルヴァーナに迫ろうとするが、彼が、フォービドゥンの柄を分離させた。そして、ケルベロスが飛びかかるうとしたときそれは起こった。

「征くぞ、^{ブラッドプリズン}鮮血牢獄！！」

その一言と同時に、ニルヴァーナを中心に鎖と刃が宙を舞い次々とケルベロスを屠り始めた。どうやらケルベロス自身のレベルはそれほど高くなかったらしい。次々とダメージが蓄積されていく。数分後、空中で三つ欠片が舞った。今の技はプレイヤー自身が編み出すスキルの一つで、鎖鎌用の攻撃スキルと大剣用の攻撃スキルを組み合わせたもの。曰く、その牢獄の中で囚われた敵は鮮血を散らす。そのことから鮮血牢獄^{ブラッドプリズン}という名前がついた。青白い欠片の舞う中で

ニルヴァーナが言い放つ。

「吼えるな、駄犬!!」

まさか秘蔵のケルベロスが一瞬で蹴散らされるとは思っていなかったのだろう、ミルティが取り巻きを盾にして逃げ始めた。尤もその取り巻き達もすぐにウォルターとトーヴァートによって、ものの数分で狩られてしまった。圧倒的すぎる、そして肝心要のミルティは会場の一番奥にある小部屋でガタガタ震えていた。何故自分が襲われるのか分からない、何故自分が命を狙われるか分からない、そして、扉が開いた。あの四人を倒した取り巻きかと思って顔を上げると、そこにいたのは取り巻きではなかった。黒い服を全身に纏った男が目の前に立っている。

「あ……あひ……」

声にならない悲鳴を上げてミルティが逃げようとするが壁にぶつかった。目の前からは男が迫り来る、怖い、怖い、怖い、自分が殺されると分かっているからなおのこと怖い。

「あ、あたしが何したって言うのよ! 一別に何もしてないじゃない
《……………》!」

だが、その一言がいけなかった、ニルヴァーナが大剣をミルティの近くに振り下ろす。床が碎け散った。

「もういい、言い訳くらい聞いてやろうと思ったが聞く気も失せた。
おまえは今ここで消えてもらう」

「ふっざけんじゃないわよ!!」

ミルティが腰の鞘に装備していた剣を抜いた。だが、その剣すらもフォービドゥンによって耐久値を削られる。

「これは、お前にやられた黒猫騎士団の分だ、受け取れ!!」

分離させた大剣の刀身がミルティの体に突き刺さる。一撃でミルティのHPが底をついた。彼女の体がポリゴンの欠片となって砕け散る。

「やっと終わったか」

「ええ、無事に終わりました」

部屋の外にはウォルターとブリジットが待っていた。ウォルターが冷静に聞いてくる。同じように静かに返すニルヴァーナ。

「じゃ、帰ろう。もうすぐ大挙してここに聖十字騎士団の連中が押し寄せてくるって」

ブリジットが彼の手を引いて外へ出ていく。外ではトーヴァートとルーナが待っていた。

「では、撤収だ」

その一言で全員が会場の外に出ていく。こうして、彼の復讐は終わった。この事件は後々『碧衣の旅団』襲撃事件として大々的に捜査が行われた。戦闘のどさくさにまぎれて脱出した団長の情報により、下手人は見つかるかに思えたが捜査は難航、ミルティの威光だけで成り立っていた『碧衣の旅団』の敵は多く、その影響もあつて

手伝う者は皆無だったという。こうしてニルヴァーナの復讐は一旦
終わりを告げたかに見えた。

第6話 報復の日（後書き）

では、感想お待ちしております。

第7話 幕開け（前書き）

過去編最終章！

第7話 幕開け

ロヴェラ火山 火口付近 23・45

溶岩が空を赤く染めている。その中をニルヴァーナは一人で歩いていく。あの事件から数カ月後、『暁の大隊』は解散した。リーダーであったトーヴァートの行方が分からなくなったのだ。それによりギルドは解散、同時に彼の師匠でもあったウォルターも姿を消した。ブリジットやルーナからも誘いを受けたのだが、今は一人でいいと断ってしまったのだ。

（それに、こんな重罪人が一緒にいたらあいつらにも迷惑が掛かるだろ）

そんなことを考えながら山を登っていく。火山の山頂には一匹の竜が棲んでいる。今回の依頼はその竜の討伐だった。麓の村であらかじめクエストに関する情報を集め、竜の活動時間となっている夜にこうして行動している。彼がここに来たのに特に理由はない、ただ、敵を狩るためにこうしてあちこちを渡り歩いている。上空から飛翔音が聞こえてくる、いよいよ今夜の狩りの相手がやってきた。黒い体躯の巨大な竜だ。背中に装備されている剣を抜く。

「さて……征くぞ！」

その言葉と同時に竜の懐へ猛然とダッシュ、まずは通常攻撃5連撃、派手にエフェクトが散る。竜が咆吼して空へと飛び立とうとしたが、その翼に大剣の刀身が突き刺さる。バランスを崩して地上へと落下する竜。だがすぐに立ち上がると、火炎ブレスを3回放った。全て避けつつ、再び距離を詰める。竜の顔面に大剣用3連撃スキル《トライ・ストライダー》が直撃する。体勢を大きく崩したところ

に追い打ちをかけようとしたが、そこで、竜の尻尾による攻撃がニルヴァーナを吹き飛ばした。一撃でHPの五分の一が持つて行かれてしまう。地面に叩き付けられてそのまま滑走するニルヴァーナ。起き上がってにやりと笑う。

「久しぶりに楽しめそうだ」

そうつぶやくとニルヴァーナは再び地面を強く蹴った。

旅団が解散して以降、彼はクレイン達『黒猫騎士団』のメンバーに会うことが出来なかった。仕方のない話だとは思う。それでも彼は時々思う。もしあのとき、クレイン達が『碧衣の旅団』の誘いを断っていたらどうなっていたらどうかということを。何か変わっていたかもしれないし変わらなかったかもしれない、だが全てはもう過去のことだ、今更過去のことを悔やんでも、彼らが戻ってくるわけではない。そして、起こってしまったことに対しては自分で責任を取るしかない、例えそれに自分の意志が関わっていなかったとしても・・・だ。だから彼は剣を振る続ける、振るうことを辞めない。辞めてしまえば『黒猫騎士団』壊滅の責任から逃げたことになってしまうからだ。だから今日も彼はこうして剣を振り続ける。

目の前の竜は身体の一部がはがれ、翼や顔もボロボロだった。尻尾は既に斬り飛ばされ、足の爪も割れてしまっている。対するニルヴァーナもそれに負けず劣らず満身創痍だった。手に持っているのはフォービドゥンではなく、錬金術で作り出した真っ黒な剣を持っている。フォービドゥンの刀身はついさっき折れてしまった。ここ最近の過激な狩りと今回の戦闘で消耗していたらしい、碌に武器耐久度を見ていなかったツケだ。刀身の一部は竜の背中に突き刺さっている。回復アイテムも大分使ってしまった。

(ここまでやって倒れないのも久しぶりだが……勝てんのかこれは?)

そんなことを考えつつ、両手に持った剣を振るう。竜のあちこちには剣が突き刺さっていた。それが戦闘の激しさを物語っている。

(くっ!)

火炎ブレスを避ける。再び距離を詰めて竜の頭に一撃を見舞う。竜が苦しげに咆哮するが、それに構わず更に攻撃を続ける。竜の顔に派手なエフェクトが散った。

さらに数回死にかけて、手持ちの回復書いて無も使い切った直後、ついに竜が地面に倒れた。ポリゴンの青白い光とともに竜の体が消滅していく。そのあとに残ったのは素材アイテムと黒い大剣だった。しかも、フォービドゥンに負けず劣らず長大な剣だ。近づいて剣を引き抜く、剣そのものが真っ黒で、柄もかなり長い。

「持って帰るか」

大剣を鑑定してもらうために火山を離れる。転移用のアイテムを使って、街でも有名な鑑定屋に見てもらった。そこで分かったのはこの大剣の銘とステータスだった。大剣の銘は『ティアマトー』黒い長大な刀身に十字架が突き刺さったようなデザインの大剣で、柄には白い包帯のようなものが巻かれている。

(こいつが当分のメイン装備だな)

そんなことを思いつつ現在拠点にしている街『クロスリアード』の中央通りに出ようとしたとき……遠くの方で爆音が聞こえてき

た。本来なら町中では鳴り響かないはずの音、それが鳴り響いている。今回のアップデートで行われたのは街の戦闘フィールド化で、宿屋や一部の建物の中以外、街は全域が戦闘可能になっているのだ。だが、基本的に『街では戦闘を行わない』という暗黙の了解があるため、基本的には戦闘は起こらないはずなのだが、その音が響いていた。夜のクロスリアードが燃えている。遠くでは火の手が上がっているのが分かった。それと同じく街から脱出しようとするプレイヤー達が走ってくる。

「おい、何が起きてるんだ?!」

「なにがって……あいつらだよ! 亡国の騎士団の連中だ!!」

亡国の騎士団……聞いたことがある。謎の多いギルドでこの世界のあちこちで戦いを繰り返している連中だ。構成員の数も、戦闘能力も、拠点の位置も何一つ分かっていない。

「亡国の騎士団……か」

気が付くと、いつの間にか中央通りに立っているのは、ニルヴァーナだけになっていた。そして……通りに一人の女性が現れた、白い重鎧を着て、白いマントが翻っている。手には巨大な槍を持っている。

「貴様は何者だ？」

「俺は……ニルヴァーナ、見ての通り大剣使いだ」

「そうか、私はコーデリアという。見ての通り槍使いだ」

そう言ってコーデリアが背負っていた槍を振るう、その槍には見覚えがあった、白と黒が入り交じったデザインの槍、あれは……。

「魔槍グングニル……存在したのか」

「一目で判断するとはなかなかだな。では……征くぞ」

それと同時にコーデリアが前へ飛んだ。グングニルが石畳に大穴を穿つ、バックステップで避けるとニルヴァーナもティアマートを抜いた。コーデリアがグングニルでティアマートを弾く、闇夜に火花が飛び散った。白と黒が交錯する。いつの間にか二人の周囲の建物は全てが炎に包まれ、炎の灯りが二人を照らしている。そして、コーデリアが再び前に飛んだ。それに合わせてニルヴァーナも前へと飛ぶ、そして……。

夜の街に青白い雷光が迸った。

この事件での被害はクロスリアードの市街全域が全焼、宿屋やクレスト受付場などは残ったが、それ以外の場所はほぼ全てが燃えてしまった。そして、燃えさかる街の中心で戦っていた黒コートの大剣使いと白い鎧の槍使いの姿は忽然と消えていた。だがそれを気にすることなくBW Oは盛り上がっていく。

物語はまだまだ終わらない。

第7話 幕開け（後書き）

今回の話をもって過去編は終了です。次回からはいよいよ本編が開始されます。投稿まで少し時間が掛かるかもしれませんが、なるべく早く投稿する予定です。では感想お待ちしております。それでは！

第8話 日常（前書き）

新章というか、本編スタート!!

第8話 日常

クロスリワード火災事件から数ヶ月後 ウェトナ平原 22..56

青白い二つの月の下に1人の男がいた。ぼさぼさの黒髪で服装は剣と魔法、ファンタジーの世界をブチ壊しそうな服・・・スーツにロングコートブーツという出で立ちだ。シャツも黒で第1ボタンとネクタイを緩めている。コートが風にはためいている。口にはくわえ煙草。100%ハードボイルドな雰囲気な男だ。

「おい、オッサン」

いかにも軽そうな風体のプレイヤー・・・放っている雰囲気からプレイヤー狩りを楽しんでいるPKの男女が4人。構成は片手剣使いが2人、魔術師1人、双剣士1人、リーダーは双剣士の女PCらしい、性別固定・・・つまりネカマではなく、あのキャラクターを操っているのは本物の女性なのだろう。

「何だ」

「俺達さア、金に困ってるんだよ、だからさア……」

「恵んでくれ……か」

「物分かりよくて助かるよ・・・オラ、さっさと出せよ」

「邪魔だ、どいてろ」

そう言ってPK四人の横を通り抜けようとしたとき、PKの一人

が武器で彼の通路を遮った。

「何無視してんだヨ、話はまだ」

頭をモヒカンにした片手剣使いは最後まで言葉を言いきる事ができなかった。理由は簡単、モヒカンが男によって倒されたからだ。

「デメエツ！よくも……」

双剣士の女性PCが迫るが甲高い音によってその剣が防がれる。

「え……？」

双剣士が間抜けな声を出した、次の瞬間男の長大な剣が双剣士を切り裂いた。黒と白の刀身に透き通るような水色の刃に白の柄、刀身には金色の逆十字が描かれていた。呆然としている二人に今度は男が攻撃に移った、前にジャンプ、一瞬で距離を詰める、あんな大剣を軽々と片手剣でも振るうかのような筋力値もそうだが、一気に距離を詰めてきた跳躍力も尋常ではない。

「くっ！」

狙われた魔術師が反応するよりも早く大剣の一撃が魔術師をポリゴンの欠片に変えた。

「う、うわあああああああっ！」

仲間がやられた恐怖のあまり、最後の一人が逃げ出そうとしたが・
・。

「お友達を置いて逃げるな」

そういったとき大剣の柄が五つに分離する、柄と柄は多節棍のように鎖でつながっていた、五つの内の一つの柄を男が持って投げる。大剣の刃が男に命中。片手剣士がポリゴン化して消えた。あたりは何事もなかったかのように静まり返っている。男が大剣を元に戻して腰の後ろの鞘に剣を納めた。コートのポケットから煙草を取り出してライターで火をつける。男の名前はニルヴァーナ、大剣の刃に分離する柄を持ったハイブリッド武器の刀身には『ティアマト』という文字が書かれていた。

リンデリータ 19・44

ニルヴァーナはここ最近の拠点にしている街の一つ、リンデリータへ戻ってきた、周囲を広大な樹海に囲まれた街で自然を生かしたファンタジックな街にダークスーツとロングコートは雰囲気的に合っていない、中世の甲冑のような鎧を着たPCが大通りを歩いて行くのを見ると一層そう思う、が大して気にしない。

彼の職業は大剣士や槍使いの上位派生職業の1つ、パラデイン。レベルは82、基本的にパラデインはその職業である大剣士や槍使いの特性を受け継ぐため、技も似たようなスキルしか引き継げない、複数のPCでパーティーを組む時は援護として魔術師や僧侶を組み込むのが、セオリーだが彼の場合は今の職業になる前に魔術師が使用する術式や錬金術にも手を出しているため、本来なら複数人で行動しなければならぬところを単独で行動できるようにしている。

彼は行きつけのリンデリータにある大衆酒場に入った、手っとり早く情報を手に入れるには酒場が一番、という認識はあながち間違っていない。入ってすぐのところに巨大な掲示板がある。ギルドメ

ンバーの募集や特殊クエスト、PK禁止などの張り紙が所狭しと貼られている。手近なテーブルに座ってシステムウィンドウの中のアイテム欄を開いた。

「売れそうなのは……これとこれか」

情報屋から買ったアイテムの相場を確かめながら呟く。

武器の中にも彼が使っているティアマトーのようなユニークなものから、この世界のどこかにあると言われている聖剣エクスカリバーのようなメジャーなものまで様々だ。あいているテーブルに座って店のウィンドウを開くと、この店で一番安い一番安い茶を選ぶ、この世界のはるか東の国の名産品だそう。それをすすりながらワールドニュースを眺めることにする。最近話題の新モンスターや神槍ゲイボルグ獲得クエスト解禁のニュース、新フィールドである航空諸島の探索クエストなど……今日もこの世界は概ね平和だった。周囲の話に耳を傾けてみる、中級のプレイヤー達が話しているのはもっぱら伝説武器のことだった、伝説武器は持つだけで有名になれるためそれだけ関心が高い。

「おい、あいつだ……」

「ちっ、何でこんなところにいるんだよ……」

近くのプレイヤー達が俺の存在に気付いたらしく小声で話し始めた。そろそろ頃合いなので彼が酒場から出て行く、酒場でまとめた素材を道具屋に売り払ってから、次に向かったのはメインストリートから少し離れた路地に入って裏通りだった。ここはメインストリートに存在するNPCが営業している武器屋ではなく、プレイヤーメイド、つまり鍛冶スキルを上げたプレイヤー達が営業している店が軒を連ねている。彼はそんな中で一番大きな店の中に入っていく。

最近は知り合いの営業している武器屋に行っていないと思いつつ武器の整備が終わるまで待っていた。煙草をくわえて火をつけると夕空に紫煙が舞った。数分後、耐久度が元に戻った武器を装備し直す。

「・・・何か、狩りに行くか」

そう呟くと彼は大通りを抜けた。

第8話 日常（後書き）

お気に入り登録してくださった方、評価してくださった方、これからよろしくお願いいたします。では、いつも通り感想をお待ちしています。

第9話 迷いの森で（前書き）

メインヒロイン登場！

第9話 迷いの森で

彼がやってきたのは何処の街にもあるクエスト受付所だった。だが、彼が向かったのは受付に立っているNPCのところではなかった。目的の場所はクエスト受付所の近くにある転移用クリスタル、青く光る球体の周りを土星のリングのように金色の輪が回っていた。そして青く光るクリスタルの前に手をかざしてニルヴァーナがつぶやいた。

「迷いの森」

ニルヴァーナがそういうと一瞬目の前が暗くなり、次に明るくなったときはもうフィールドに転送されていた、このシステムが導入されてから結構立つが彼は未だにこの感覚に慣れることがない。

今回来たフィールドは『迷いの森』時間帯は夜、星空の下に黒い針葉樹林の森が広がっている。とりあえず暗いので、アイテム欄からランタンを取り出す。暫く歩いているといきなり、モンスターが襲ってきた、夜行性のナイトゴブリンだ、数は4体、手には棍棒を持っている。どこのフィールドにでもいる小型のモンスターだ。

「即席錬成！」

手を合わせると青い雷光が奔る、そして錬成したのは黒い剣、それを使ってナイトゴブリンを倒す。使い終わった剣は捨ててポリゴンのかけらとなった。時間にしてわずか数秒のことだ、ゴブリン達を殲滅すると、再びランタンをかざして歩いていく。暫く歩くと森がとぎれて、白い花の広がる花畑に出た。空には二つの蒼い月が浮かんでいる。ここまで明るいランタンはいらないのでアイテム欄に戻す。花畑の中を歩いていくと・・・白いドラゴンが現れた、大

きな翼に攻撃的な爪が特徴なここのボスモンスターだ。最奥部にある巣から食事に出てきたところに遭遇してしまったらしい。

「出たな」

ティアマトーを抜き放つ。目の前にいる竜に向かって一言放つ。

「行くぞ」

その言葉と同時にドラゴンに向けてジャンプ、大上段からの一撃がドラゴンの体に直撃する、滞空している間に2回、3回と身の丈以上の大剣を振り回す。彼が地上に降りたところでドラゴンがブレスを3回放った。

「分離、飛刃結界！」

ティアマトーの柄が5つに分離、ニルヴァーナを守るようにしてドーム状に舞う、その直後、竜の放ったブレスが直撃、盛大に爆発のエフェクトが散ったが彼自身はダメージを受けていなかった。

このBWOでは様々なシステムスキルが存在する。片手剣だけでも100以上のスキルが存在するらしい。だがこれとは別にプレイヤー自身が編み出す『プレイヤーズスキル』というものが存在する。ニルヴァーナが使っている《分離 飛刃結界》もこのプレイヤーズスキルで、斬撃で相手の攻撃を防ぐというものだ。

「そうらっ！」

防御から攻撃へ、ブレスを吐いた後の硬直時間を見逃すニルヴァーナではない。今までドーム状だったティアマトーの刀身がドラゴンの体に突き刺さった。

今のもプレイヤーズスキル、大剣のスキル《ヴォルケンインパクト》と鎖のモーションを合体させて編み出したスキル、《ヴォルケンデストラクション》だ。苦しむかのようなドラゴンの咆哮、鎖を引いてドラゴンに刺さっている刀身を抜く、再び柄を連結させて大剣状態へ、再びドラゴンがブレスを吐くモーションに入るが、それより早くニルヴァーナが前に跳んだ、一気に距離を詰めてドラゴンの内懐へ、大剣のスキル《ブラッドインパクト》を3回繰り出す、HP回復のために逃げようと飛び立とうとするドラゴンを地上に引きずり下ろしてさらに攻撃、ダメージ音と赤いエフェクトがはじける。

次々と繰り出される攻撃でドラゴンのHPバーはもうレッドに突入していた。そして・・・ドラゴンが花畑に倒れる。花びらが舞う中でドラゴンの巨体が青白いポリゴンの欠片となって消えた。

「強さはそこそこ……か」

そう言ってドラゴンが落としたドロップアイテムを拾う。

「おお、レア金属ゲット」

ステータスウィンドウのアイテム欄を見てそう呟いた。ティアマトーの強化に使えるだろう。

「行くか」

再び花畑を歩きだすニルヴァーナ、周囲に人は誰もいない、経験値稼ぎならほかにも有名なフィールドがあるのでたいいのプレイヤーはそこで経験値を稼ぐ、周囲に響くは風と葉鳴り音のみ。今回このフィールドに来たのは情報屋から買った情報にあった希少金属素材と経験値稼ぎを兼ねていた。

本来ならあのドラゴンも4人か6人のパーティーを組んで作戦を練りながら戦うもののだが、彼にはそれがない、ティアマトーを使って突撃、魔術も回復も自分でできるようになった。パーティーを組んでプレイするのが羨ましくないと言えば嘘になるが彼自身はこの一人で戦うことを気に入っていた。仲間意識の強いプレイヤーたちの間では『狂戦士』だの『はぐれ狼』だのと呼ばれているが特に気にはしない。

前に一度ギルドに所属していたことがあったが、その時のメンバーは、酷いいやがらせを受けてこの世界から去ってしまった。それ以降、何度か臨時パーティーに加わったりはしているが、これといって特定の誰かと組むことはしなかった。それはただ、誰かと組むのが怖かっただけかもしれないと彼自身は思っているが、今更どうしようもない。全ては過去のことと、残っているのは結果だけだ。

「だいぶ奥まで来たな……」

いつの間にかかなり奥に入り込んでいた。月が出ていても足下が見えないので再びランタンを取り出す、黒い針葉樹林の間を彼は静かに歩いていく。不気味な森に浮かぶ人魂……これだけで相当怪談チックな話だ。

（彷徨うのはかつてこの地で殺された人の亡霊……あたりがメジャーだろうな）

そんなことを考えながら黒い森を抜けると再び花畑があった、今度はさっきの花畑よりも広大で中央には湖があった。遠くのほうで戦闘が繰り広げられている、花畑の中を進むニルヴァーナ。戦っているのはアップデート時に追加された種族の一つ、機械人形^{マキナ}だった。

この機械人形というものは簡単に説明してしまえばアンドロイドのようなもので、必ず身体はどこかに機械的な部分がある。基本的にはプレイヤーの身の回りの世話や、戦闘に連れて行けるNPCに分類されている。だが他のNPCとは違い、主人と会話を成り立たせたり、冗談を言ったりとプレイヤーと何ら変わらない行動をする。

（ハグレ機械人形とは随分珍しいな）

時々、心ないプレイヤーが維持できなくなった、飽きたという理由で機械人形を捨てることがある。こういった機械人形はそのうち『野良』や『ハグレ』として分類され、モンスター同様に討伐されてしまう。野生で鍛えられたハグレ機械人形はそこらのモンスターより危険なので、一つのギルド総出で討伐することもあるという。

彼女の相手は・・・このフィールドではめったに出現しない単眼巨人サイクロプス、かなりのハイレベルモンスターだ、手には盾と剣、大ぶりの攻撃だが当たればかなりHPを持っていかれてしまうだろう。対するハグレの方は手に黒い大太刀を持っていた。服装は和風メイド服、履いているのは黒光りするロングブーツで後頭部にある四本角型の感覚器が特徴的だ。サイクロプスが剣を振り下ろす、ハグレがそれを避けて手の剣を振るった、だがその攻撃はサイクロプスの盾によって防がれ、直後に剣が叩き込まれた。花畑の上を滑るハグレ、花びらが夜空に舞った。彼女のHPは残りわずか、後一撃でも食らえば彼女は这个世界から消失するだろう。

・・・・・・彼にはこのまま彼女を見殺しにすることもできた。ハグレの一体くらい、どうということはないいつもの彼ならそうしていた。だが・・・彼はそれをよしとはしなかった。

「ヒール！」

魔法陣が展開して、ハグレのHPバーが回復する。サイクロプスに向けて大きくジャンプ、ティアマトーを空中で抜く、コートがはためく。

「ブラッディダンシング！」

大剣スキルの中で比較的隙の少ないものを放つ。腕に命中、サイクロプスがよろめいた。

「今だ、やれ！」

「Will！」

ハグレが両手に持っている長剣から双剣のソードスキル《月閃》2連撃、ド派手なエフェクトが散って、サイクロプスが大きくノックバックした、今度はニルヴァーナがティアマトーの通常攻撃5連撃、片手剣でも振っているかのようにティアマトーを振り回す、そこへ少女が追いついた。8連撃片手剣スキル、《レイジングハーツ》が全て直撃変幻自在の軌道で相手に攻撃の隙を与えない。それが止めとなったらしくサイクロプスはポリゴン化して消滅化した。ハグレがニルヴァーナの方に向き直る。

「ありがとうございます」

「……ああ、すまん。横からいきなり」

「いえ……あのままだと私もやられていましたから……助かりました」

「お前は……ハグレか」

ニルヴァーナが目の前にいる機械人形にそう尋ねた。

「そうですね、一般的な分類から言えば私はハグレ^{マキナ}機械人形に分類されますね」

そういつてハグレが風に揺れた髪をかき上げた。

「唐突ですが……私のマスターになってくれませんか？そう遠くない内に私は討伐されてしまうかもしれません、ここで遭ったのも何かの縁でしょう、もちろんそちらが良ければ、の話ですが……」

ハグレがそんな提案をしてきた。確かに彼女の言う通り、このままならそう遠くない内に討伐されてしまうかもしれない。そして彼は捨て猫を見捨てるほど冷血な人間ではなかった。

「認証方式は？」

「こうです」

その直後、ハグレがニルヴァーナの指を咥えた。数秒ほどその状態でいるとハグレの方が離れた。

「認証完了しました。これからはあなたが私のマスターですので……名前をつけてください」

ハグレが機械人形らしく折り目正しい態度で彼に向き直った。

「名前ねえ……そうだな……蒼華、なんてのは？」

「Wil、なかなかいいセンスですね。ではその名前でお呼び下さい。よろしく願いしますね、マスター」

そう言々とハグレ・・・ではなく蒼華はにこりと微笑んだ。一陣の風が花びらを巻き上げていく。こうしてこの月夜に一人のプレイヤーと一人の機械人形^{マキナ}が出会った。

第9話 迷いの森で（後書き）

この中で蒼華が言っている「Wil」とは軍隊で使われる「了解」の一種である「Will comply」の省略形「Wilco」の頭の3文字です。では、感想お待ちしております。

第10話 蒼華の楽しいハンティングレポート

黒川裕介の朝は早い、6時に起きて、朝食を作る家は都内にある一軒家、現在一人暮らしなので誰もいない。親代わりの祖父母は遠くに住んでいるため会いに行けるのは夏休みくらいなものだ。朝食を済ませて学校に行く準備をする。家を出るのは7時半、愛用のマウンテンバイクに乗って学校へ、小高い丘の上にある設備の整っていることで有名な学校だった。

日本中、どこの学校どこの教室でもあることだが、クラスには様々な役割がある。リーダー、サブリーダー、委員長、ギャル、不良、バカ、能筋、カラオケ担当、盛り上げ役、いじられっこ、アイドル、お嬢様・・・などと、上げていけばキリがない。基本的にクラスの中心で引っ張っていく人物に人は集まり、大抵のことは彼らが勝手に決める。地味なものや発言力のないものの意見は意見として認められず大声で叫ぶ者やリーダーの意見のみが意見として認められる。現在はロングホームルーム、1ヶ月後に開催される音楽会で何をするかについて意見を交わしている最中のことだ。

（まあ、正直な話どうでもいいんだがな）

学級会は段々まとまりがなくなりつつあった、委員長が必死に収集しようとしているが手に負えない状況となりつつある。

まるで動物園だ、と裕介は思う。有り余る青春の熱量を抱えた獣たちの群れ、教室が檻、その中にいるのは動物たち。

（俺もそれと一緒にされると困るんだが……ま、いいか、新刊でも読もう）

リュックの中からI podと漫画を数冊取り出す。ちなみに彼の

立ち位置は中立、クラスの御意見番的な存在だ。全く面倒な立ち位置についたと心のなかで溜息をつく。音楽を聴きながら彼は昨日出会った機械人形・・・蒼華のことを思い出していた。

授業が終わると、彼はすぐに家へと帰っていく、家は都内にある学生向けのマンション。シャワーを浴びて軽い夕食を済ませると、プレイするためのヘッドギア型コントローラーを頭につける。意識が吸い込まれていくような感覚、こうして電腦空間で今日も彼の戦いが始まった。

リンデリータ 11..21

ニルヴァーナが到着する数分前、蒼華はリンデリータの街を散歩していた。空は澄み渡るような青色、太陽がさんと降り注いでいる。今はそれほどでもないがこれから大量にプレイヤーが増えるだろう、そんなことを考えていると、昨日から彼女の新たな主となった黒ずくめの男がやってくるのが見えた。

「おはようございますマスター」

「今は夕方なんだが……大丈夫か？」

「今のは単にマスターをからかっただけです」

蒼華がしれっとそんなことを言った。ファンタジックな世界観の街の中では彼女も若干目立つ。和風メイド服を着てブーツを履いた現代から迷い込んできたかのような出で立ちの機械人形、蒼華。

「蒼華、そういえば昨日フレンドリスト登録してなかったよな」

フレンドリスト登録とはこの世界における名刺交換のようなもので自分の名前、LV、ステータス、所持金、装備している武器が書かれているカードを互いに送りあう。2人は互いに蒼く光るステータスウィンドウを開いて互いの名前を登録した。それと同時に互いのステータスも見る。

（なるほど、LV82に全てのパラメーターが高い……取得スキルもほとんど戦闘向けですね……初めての主にしてはかなり優秀です）
（LVは無し、種族は機械人形、スキルは重力制御に錬成……機械人形ってのはみんなこんなに戦闘力が高いものなのか……？）

互いにカードをみながらそんなことを考える。暫くしてから、ほぼ同時にウィンドウを閉じた。

「マスターどうでしたか？」

「なあ、蒼華。機械人形ってのはみんなこんなに戦闘力が高いものなのか？」

「それは不明です、私は戦闘、家事両方ともこなせるはずですが……何か問題でも？」

「いや、特にない。それで、今日はどうする」

試しに今日の予定を尋ねてみる。すぐに彼女の方から答えが返ってきた。

「マスターに私の戦闘力を見せつけます。このためにフィールドも

決めてあります、行きましょう」

「用意周到だな……それじゃまあ、見せてもらおうとしようか」

そういつて2人はゲートのある建物へと足を向けた。

ウィトナ熱帯雨林 12…11

今日2人がやってきたのは、海に近いジャングルと白い砂浜、小さな廃村があるフィールドだった。時間は昼。太陽が空高く昇っている。

「いかにも夏ですね……」

「暑いのは嫌いか？」

「Wil、溶けそうになるので嫌いです……」

転送されてきたのは、ジャングルの中を2人が歩いていく。海が近いので、出てくるのは蟹や海老のような甲殻類のモンスターが多い。

「はっ！」

蒼華が腰の鞘から大太刀を抜き放って次々とモンスターを倒していく。彼女の使っている剣の銘は先刻のステータスを見て判った。腰に差している二本の刀のうち大太刀の方は妖刀『罪華』もう一つの腰に差している通常サイズの日本刀が『斬月』という。

「せいっ!!」

ニルヴァーナの考えとはお構いなしに蒼華が罪華を振るう、その一撃が黒光りする甲殻類型モンスターに直撃して大きくHPを削った。あの大太刀そのものもかなりの業物だが、蒼華自身もかなり優秀だ、あれだけの大太刀を片手で振るうのはそう簡単にできることではない。数分後、湧いてきたモンスターを一掃すると、蒼華はようやく大太刀を鞘にしまった。

「いやはや……ここまでは思わなかった。すごいな」

「このくらい普通です」

それから数回モンスターとの遭遇戦を繰り返してジャングルを歩いていくと、不意にジャングルが途切れて砂浜に出た。目の前には蒼い海と白い砂浜が広がっている。波打ち際を歩いていくと目の前にこのフィールドのボスモンスターが現れた。巨大なヤドカリのようなモンスターで、背中にはこれまた巨大な巻き貝を背負っている。

「さて……おいでなすったな。いくぞ」

「Wil、参りましょうか」

それと同時に二人が武器を抜いた。ニルヴァーナが右から蒼華は左側から攻撃を開始する。ヤドカリはどっちから先に攻撃するか迷っているように見えたが、ニルヴァーナの方に軀を向けると両手の鋏を叩きつけてきた、叩きつけられた衝撃で砂が舞う。

その間に回り込んだ蒼華が長剣3連撃スキル《ストランディア》を放った、術後の硬直時間は少し長いが両手槍スキル並のダメージを与えられる。対人戦ではそうそう連発できないがAIが動かして

いるモンスター相手なら気兼ねなく使うことが出来る。大太刀が赤く光って上段から振りおろして一撃、返す刃で二撃、そして渾身の突きが凄まじいエフェクトと共にヤドカリへ直撃した。ヤドカリが左手の鋏を振るうが蒼華は難なくかわして大太刀による通常攻撃5連撃、何発かは堅い装甲殻に阻まれたが鋏にダメージを与えることに成功、そのままバックステップで距離を取った。

ヤドカリが蒼華を追撃し始めるが、今度はニルヴァーナが攻撃に転じた。大剣の5連撃スキル《アーティック・レイン》を放つ、大剣の重量を生かして『斬る』というよりも『叩き割る』ことを重視したスキルだ。これは5発全てが鋏に直撃、派手なエフェクトが散って装甲殻が砕け散った。

ここでニルヴァーナがティアマトを六分割、刀身と一体化している柄を投げた。彼の狙いは鋏と腕をつなぐ間接部、狙い違わず間接部に命中、そのまま柄を引っ張って強引にヤドカリの腕をねじ曲げる、そこへ、ヤドカリの正面から蒼華が走ってくる。

ニルヴァーナが封じていない方の鋏が蒼華に向かって振り下ろされるが、サイドステップで避けて内懐に入り込んだ、一回ジャンプして大上段から放たれた罪華の一撃がヤドカリの弱点でもある顔面に直撃、今日一番の巨大なエフェクトが輝いた。そのまま二度、三度と罪華の攻撃を叩き込んでいく。

六回目で轟音と同時にヤドカリの全身から力が抜ける、ポリゴンの欠片と共にヤドカリが消滅していった。これで討伐完了だ。

「どうでしたか、私も結構できるでしょう」

大太刀を鞘に戻しながら、どこか誇らしげに蒼華が言った。

第10話 蒼華の楽しいハンティングレポート（後書き）

タイトルが恐ろしく投げやりです・・・では、感想お待ちしております。

第11話 Rode of War (前書き)

今回の話は若干短めです。

第11話 R o d e o f w a r

倒したヤドカリがドロップしたアイテムに武器類やレアドロップの品はなかった、あったのは巨大な蟹夾と料理用の素材アイテムがいくつかだけで、これといってめばしいものはなかった。転移用のゲートを探してそこからリンデリータへと帰還する。

リンデリータの街に帰ってくると既に夜だった。街のあちこちに灯りが灯っている。上空を大型の航空艦が通り過ぎていく音をBGMに二人はメインストリートを歩いていく。プレイヤーが営業している道具屋で料理用の素材を売ってから再び移動を開始する。

特定のホームを持たない二人は酒場へと移動した、酒場は相変わらず賑やかで様々な装備を持ったプレイヤー達が集まっている。片手剣、大剣、槍、刀、杖、銃、弓・・・様々な武器が並んでいる、武器のデザインも店で買えそうなものからモンスタードロップと思われる品まで様々だ。テーブルに座っていつものように茶を頼む、蒼華は茶菓子をついでに頼んでいた。どこに行っても黒ずくめに和風メイド、という組み合わせはやはり浮いていた。それでも二人は気にすることなく話を始めた。

「そう言えば……もうすぐ領土戦ですね」

「ん……そうか、もうそんな時期か」

酒場の白い壁に水晶玉から映像が映し出されている。その映像の中には近く行われるという領土戦の映像もあった。あのアップグレード以降、アナウンスされていたイベントがついに始まるうとしているのだ。運営側の設定では複数の国家同士による戦争だが、実質的には大規模ギルド同士の戦争で、大小関わらず様々なギルドが参

加していた。その中で今回の領土戦に名乗りを上げているのが『聖十字騎士団』と『円卓連合』の存在だった。二つともアップグレード以前から存在している大規模ギルドで、互いに仲がすこぶる悪いことあるごとに難癖をつけてはギルド間抗争を延々と繰り広げている、その抗争の煽りを食らって壊滅の憂き目をみた弱小ギルドは毎回膨大な数に上る。だが『聖十字騎士団』『円卓連合』の人気は凄まじく、この二つのどちらかに所属することは一種の誇りでもある。

この二つのギルド以外に今回の領土戦を一番待ち望んでいた連中はいいないとニルヴァーナは思う、イベントにかこつけて叩き潰してしまおうという魂胆が丸わかりだ。他のギルドも聖十字騎士団側か、円卓連合側につくかで考えがまとまっていないようで、周囲に座っているプレイヤー達もその話題で持ちきりだった。ニルヴァーナがウインドウを開いてメールボックスの中から領土戦に関するルールの書かれたメールを引っ張り出す、領土戦の開催が公式に決定したときに運営側から来たメールだ。

領土戦ルール

・互いに大将を決め、そのプレイヤーが戦死した場合、相手側の勝利。

・自分の所属する陣営の領地が75%以上占領された場合は占領した側の勝利。

・運営側により戦闘が困難になった場合は引き分けとする。

・基本的に使用武装の制限は行わない。航空艦、魔導アーマーの使用もあり。

E t c e t c ……

その後にも事細かくルールが記載されているが、そこで彼は読むのを止めてウインドウを閉じる。要は実際の戦争と同じで大将が死ぬか、領土がなくなるかのどちらかで勝敗が決まるということだ。

「参加するのか？」

「楽しそうじゃありませんか」

そこでしばらくニルヴァーナが頭を抱える。機械人形にしては少し異質だ。

「ま、参加するとして、どっちの陣営につくんだ？」

「……不利な陣営側です……今のところはどっちが優勢なのですか？」

「……聖十字騎士団側だな。円卓連合は若干分が悪い」

「じゃあ、円卓連合側につきましよう」

蒼華が何の迷いもなく言い切った。試しに理由を聞いてみることにする。

「どーして円卓連合側なんだ」

「楽しそうだから……ですネ」

蒼華が少し考え込んでからつぶやいた。グラスに入っていた茶を飲み干して追加をNPCに頼む。

「まあいい、俺とお前は今のところ『パートナー』なんだからな。それじゃあ、領土戦の受付に行くか」

ニルヴァーナが茶のなくなったコップを机に置いて言った。それ

に合わせて蒼華も新しく来た茶を一気飲みして席を立つ。リンデリータにあるクエスト受付所のNPCに話しかけて、領土戦に参加登録する。その日の内に二人はリンデリータを発った。目的地は円卓連合に参加するプレイヤー達が拠点としている港街『港灣都市アグリテ』。

こうして二人の領土戦はその幕を開ける。

第11話 Rode of war (後書き)

では、感想お待ちしております。

第12話 黒服と運送屋（前書き）

新キャラ登場！

第12話 黒服と運送屋

リンデリータからアグリーテまでの道のりは概ね順調だった。途中でアグリーテに行くという商業ギルドの列と遭遇し、護衛を引き受ける代わりに街まで乗せていってもらったのだ。

「ここがアグリーテですか……いかにも港町ですね」

「それだけじゃない、この街はオルテンシア帝国軍の巡洋艦基地でもあるからな……お、丁度帰ってきたみたいだ」

ニルヴァーナが空の一角を指さすとそこには機械の鯨が浮かんでいた。上空を静かに通り過ぎていく。アップデイト追加された航空艦にはしばらくすると同じ航空艦だと分かりづらいため、名称が付き始めた。小型の数人で動かせるレベルの航空艦は『航空艇』。40人以上で動かされる大型の航空艦は小さいものから順に『フリゲート艦』『駆逐艦』『巡洋艦』そして最大クラスの『戦艦』型に分類されている。基本的にギルドが持てるのは巡洋艦クラスまで、それも数隻が限界だ。だが今回の領土戦では互いのバックには国家がついているため、数百隻近い数の航空艦がこの街に向かっていてる最中だという。また、小型の航空艇は少ない人数でも動かせるため、小さなギルドがVを貯めて移動式拠点として使っている例も増えている。

「あれが帝国軍の主力でもあるホエーリア級巡洋艦だ」

「なるほど、詳しいんですね」

「昔、いろいろあったからな」

蒼華にそう返してからアグリーテの名所ともなっている坂道を下り始めた。山の中腹から麓にかけて広がっているこの街は坂が急なところも多いので、大きな通りには路面電車が走っている。路面電車を眺めながら二人が麓にある港にたどり着くと、そこには円卓連合のエンブレムをつけたNPCが立っていた。ニルヴァーナが円卓連合のNPCに話しかける。

「円卓連合に参加予定のニルヴァーナだ」

「同じく蒼華です」

「はい、承っております。この場所までお越し下さい」

NPCが二人に地図を渡した。指示された場所はここからそう遠くない場所にある帝国軍基地。指示された場所に向かうと既に大勢のプレイヤーが集まっていた。陸港で補給を受けている、巡洋艦の他に多数の小型の航空艇も集まっている。鎧を着たプレイヤー達の中ではやっぱり二人の服装は浮いたが、二人は気にすることなく堂々と歩いていく。

今回の初戦の舞台となるのはレイヴェア大陸とリヴェリナ大陸の間にはさまれたジュデラ海が候補として挙がっていた。聖十字騎士団の本部が新大陸に移ったことを考えてもこの場所が最初の戦場になることはうっすら想像がつく。二人が基地内に設営されたテントにはいると既にブリーフィングは始まっていた。壇上では円卓連合の鎧を着たプレイヤーが説明している最中だった。手近なパイプ椅子を引き寄せて座る。艦隊同士の撃ち合いのあとに航空艇と魔導アーマーの混成部隊が突入、敵の揚陸艦と旗艦を沈める・・・という

プランだった。

（そうそう上手く行くか？）

ニルヴァーナは内心でそう思ったが口には出さない。ブリーフィングが終わると参加者達が一斉に航空艇を持っているプレイヤーのところへ話をつけに行っている。円卓連合のギルドメンバーは巡洋艦や帝国から供与された魔導アーマーを搭載することが出来る航空空母に乗り込むという。しばらく基地内を歩いていると声をかけられた、声のする方を向くと一人の黒髪の女性が走ってくる。

「なあ、アンタらもうどれに乗るかって決めた？」

「いや、まだ決めてない。これからどうしようかと思ってる最中だ」

彼がそう言うのと女性が提案してきた。

「あんたらさ、アタシの艇ふねに乗ってくれない？」

「それはこっちとしてもありがたいんだが……理由は？」

ニルヴァーナが尋ねると女性が話し始めた。彼女の本来の仕事は生産系プレイヤーが作った農作物や武器を運ぶのが役目だった。そのため数人のNPCもいたのだが。つい先日、航空艇を使ったPK集団に襲われ、彼女一人を残して全滅してしまったのだ。おまけに航空艇も損傷していたためアグリーテに降りた直後、強制的に領土戦に参加することを決められて今に至るというのだった。

「艇の方は私一人でも操縦できるんだけど護衛用の武器を使う人がいないのよ、だからやってもええな
いかな〜って思ったんだけど他の連中は悉く断っちゃうからどうし

ようかな〜って考えてたんだけど、頼んでも大丈夫かな？」

「もちろん大丈夫だ。蒼華も問題ないよな？」

後ろに立って成り行きを見守っていた蒼華に尋ねる。

「Wil」

了承の意を示す蒼華。

「相方もOKらしい。交渉成立だ」

「じゃあ、そういうことでよろしく。アタシはハルナ、元運送屋だよ」

「ニルヴァーナだ。職業はパラデイン、よろしく」

「蒼華です、機械人形ですがよろしくお願いします」

自己紹介が終わったところでハルナの航空艇を見に行く。整備用のドックにはイルカのようなデザインの航空艇があった。20mの船体の背ビレの下から尾ビレの方にかけてデッキがあった。

「あれがアタシの艇、フライドルフィン型航空艇『エイミー』だよ」

そして整備中の甲板の上には一つの銃器が固定されていた。おそらくこの航空艇の搭載火器なのだろう。設置されていたのはM134ミニガン、現実世界でもアメリカ軍のヘリコプターや装甲車に装備されている銃で銃本体へ弾薬を供給するベルトが延びている。

「あんな凶悪なものがあるとは……」

ニルヴァーナが絶句していた。さすがにミニガンは予想外だったのだろう。

「いつもは下の倉庫に格納してるんだけどね。他にも航空魚雷発射機と口径は小さいけど術式砲もあるよ」

「……運送屋の使ってる艇にしては過激すぎないか、これ」

「そうかな」

あっけからんと答えるハルナに案内されて船内に入る、船内は意外と広かった。仮眠室に割と広いラウンジもあった。最後に案内された倉庫には整備セットや魚雷、ミニガンの弾丸箱が積まれていた。

「操縦席はこんな感じ」

ハルナの言うとおり操縦自体は一人でも行えるようだった。

「了解、俺達の仕事はあのミニガンの射手か」

「そんなところだね。あ、フレンドリスト登録しとこ」

そう言ってハルナがウィンドウを開く、それと同時にニルヴァーナのウィンドウにハルナの名前が登録された。蒼華の方も同じようにウィンドウにハルナの名前が登録されている。

「じゃ、後は開始まで待つだけだね」

「そうだな、じゃ、待つか」

格納庫を出るといつの間にか空は暗くなってきた。新たな仲間とともにニルヴァーナ達はアグリーテの街へ繰り出した。

第12話 黒服と運送屋（後書き）

では、感想お待ちしております。

第13話 開戦（前書き）

領土戦開幕！！

第13話 開戦

二日後 ジュデラ海上空 9..46

あれから二日、ついに領土戦の火蓋が切って落とされた。夜明け前からジュデラ海に展開していた両軍の巡洋艦の撃ち合いに始まり、現在戦闘は第二段階・・・敵味方入り乱れる混戦へと突入していた。

「ちよつと多すぎやしないか！」

『そうはいつでも仕方ありませんマスター。文句を言わずに撃ちまくってください』

インカムから流れる蒼華の声を聞きながら甲板の上ではニルヴァーナがミニガン撃っている最中だった。青白いマズルフラッシュが空を彩る。蒼華は操縦席でハルナのサポートについていた。ハルナの操縦も神業級で何発か被弾はしているがそれでも外装をかすただけで致命的な損傷は一つも受けていない。

「四時方向から敵巡洋艦確認！艦載砲がこっちを狙ってるぞ！！」

『雲に入ってやり過ぎすよ！しっかり捕まってるて！！』

ハルナがエイミーの舵を大きくきって雲の中へと隠れる、その後ろを巡洋艦の砲撃が掠めていった。雲を抜けると目の前に航空輸送艇が飛行していた。船体のあちこちからは煙が出て大穴があいていた。

『じゃ、一発かますよ！航空魚雷、一番、二番、発射！！』

『Wil、一番、二番、魚雷発射!』

エイミーの横に生えている小さな翼から魚雷が二発、まっすぐ輸送艇めがけて飛んでいく、直撃、船体の大穴があいている方とは反対側が大爆発を起こした、輸送艇の高度がどんどん下がっていく、そのまま輸送艇は海中へと沈んでいった。現在戦況は一進一退・・・厳密に言えば聖十字騎士団が優勢になっている。空中で魔導アーマー同士の戦いが続いている。巡洋艦も次々に前へと出て、砲撃を行っている。巡洋艦同士が近くで撃ち合うこともあった、互いの被害が拡大している。

「酷くなってきてるな……」

『マスター、今から少し艇ふねが揺れるそうです、何かに掴まっています、ください』

「了解だ……って、うおわあああああつつ!!」

蒼華から通信が入った直後、エイミーが大きく回転した。振り落とされそうになるが何とかしがみつく、そんな彼の下を急速に高度を下げながら味方の巡洋艦が落ちていった。

『マスター問題はありませんか』

「蒼華、さっきのはどう考えても『少し』の範疇を越えてたように思うんだが」

『私の基準ではあれも『少し』の範疇です。マスターの『少し』がどういう基準かは知りませんが』

インカムの向こうから冷静にそう言ってくる蒼華。

『またまたく蒼華ちゃん彼のことからかってるでしょ』

『そんなことは……あるかもしれません』

インカムの向こうのやりとりを聞きながら周囲を警戒していると・
・一騎の魔導アーマーがこっちに近づいてきた、騎体はスピット
ストーム、聖十字騎士団だ。

「ハルナ、こっちに敵の魔導アーマーが接近してるぞ!!」

『数は?!』

「今のところ一騎!」

ニルヴァーナが報告し終わると同時に相手が撃ってきたが、ハル
ナの操縦のお陰か今のところ致命的な一撃はもらっていない、だが、
このままでは追いつかれてしまう。

「ハルナ、ちょっと今から魔導アーマーを撃退してくる。ちゃんと
拾ってくれよ」

『え、撃退するってここ空の上だよ!?』

「そーだよ、ミニガンの射手は蒼華、頼んだぞ!」

『マスター、行くに当たって一つ約束してください』

「あんまり無理なお願いは勘弁してくれ」

『……必ず、戻ってきて下さい。帰ってこなかったら許しませんから』

命令するような口調で蒼華が言った。

「任せろ」

それと同時にニルヴァーナが大空へとジャンプした、追撃していたスピットストームが進路を変えてこちらに接近してくる、右手に持った術式銃が彼の隣を掠めた。当たらないことに苛立ったのかスピットストームが急速に接近してくる、長銃をしまつて、腰に装備されていた接近戦用ブレードを取り出した。ニルヴァーナもティアマトーを抜く、そして空中で剣戟の音が鳴り響いた。

ティアマトーがスピットストームの長剣を弾く、スピットストームの搭乗士が体勢を立て直して再びニルヴァーナに斬りかかる。長剣を数回振り回すがその悉くがかわされてしまう、その隙にニルヴァーナがティアマトーの柄を分離して投げた、刀身は見事にスピットストームの腰部装甲に突き刺さる。

そのまま手近な場所を足場にして頭部のある位置へと伝っていく。ティアマトーを元の大剣形態に戻してスピットストームの頭部を斬り飛ばした。騎体をよじ登ってコックピットの前へ、そこでティアマトーの刀身を勢いよくスピットストームに突き刺した。騎体が下降し始める。

「おい、ハルナー。こっちは今し方終わったところだ。迎えに来てくれ」

『おっけー、しっかりすごいねー。空中で魔導アーマーを撃墜する

なんて初めてだよ』

「俺も初めてだったんだが……上手く行って何よりだ」

インカム越しに軽口を叩いていると雲の向こうから見覚えのある航空艇が近づいてきた。彼も手にフック付きのロープを持つ。エイミーが減速し始めると同時にロープを投げた。鉤爪が甲板の柵に引っかかった、成功だ。

『今そっちに蒼華ちゃんが行ったよ。いない間すっごく不安そうな顔してたから、安心させてあげなよ?』

「了解……つとこっちだ蒼華ここにいろぞ」

「お久しぶりですねマスター。ところで、帰ってきたら何か言うことありませんか?」

「……無事に生きて帰ってきたぞ」

「そういうことはありません。他に言うことがあるでしょう」

どこか拗ねたように蒼華がふくれる。

「言うことってなあ……思いつかないんだが」

「それでは、このまま手を離しても大丈夫ですよね」

「分かった、ちょっと待ってろ……えーっと、ただいま、蒼華」

「お帰りなさい、マイマスター」
我が主

蒼華が優しく笑って言った。ロープを引き上げてもらいようやく甲板に立つ。

「ハルナ、戦況の方はどうなってる？」

『やばいよ、円卓連合の空母が墜ちちゃった。とりあえず操縦席まで来て！』

そこで、ハルナからの通信が切れたと同時に二人が甲板から操縦席へと歩き始める。数分後、ハルナが操縦席にあるモニターの一つを使用して現在の状況を説明してくれた。二十分ほど前、この戦いの円卓連合側の旗艦である空母『アドミラル45』が轟沈。それに釣られる形で艦隊が壊滅的な打撃を被った。旗艦を失った円卓連合は一時は崩壊しかかったが、無事に指揮権をまとめ上げ、現在は撤退作戦の真っ只中でもある。だが、円卓連合軍は第1集結地点のアグリーテではなく第2集結地点であるアナディビア山脈へと進路を取っていた。

「現在聖十字連合が追撃に入ってる。アタシ達も逃げないとやばいことになるよ」

「確かにこれは逃げた方が良さそうだ。それじゃあハルナ、操舵は任せる。俺はまたミニガンに張り付いておくから、蒼華もしっかりサポートしてやれよ」

「Wil、お任せ下さいマスター」

そう言ってハルナと蒼華は操縦席へニルヴァーナは甲板のミニガンのところへ向かった。遠くでは聖十字騎士団の巡洋艦が円卓連合

の輸送艦を沈めている、空中で盛大な火球となって輸送艦が砕け散る。

「今回は負けたな」

遠くで繰り広げられている航空艦同士の戦闘を眺めながら彼はぽつりとつぶやいた。

第13話 開戦（後書き）

空中で華麗に迎撃するという、無茶をやらかした主人公。蒼華が心配しても仕方がないですね。では、感想お待ちしております。

第14話 小休止

アナディビア山脈 11…15

あれから数時間後、何とか聖十字騎士団の追撃を振り切った円卓連合側の航空艦がアナディビア山脈を航行していた。巡洋艦16隻、駆逐艦23隻、フリゲート艦21隻、輸送艦26隻、空母1隻、航空艇34隻、魔導アーマー52騎・・・初戦にしてはあまりにも痛すぎる損害だ。残った船も損傷している艦がほとんどでエイミーのように無傷の艦は少なかった。今のところ敵の追跡は確認されていないのでエイミーを自動操縦に切り替えて、三人はラウンジに集まっていた。

「今のところ俺達は何処に向かってるんだ？」

「この山脈を抜けたところにある平野部にオルテンシア帝国軍地上部隊の基地があるの。多分そこで迎撃するんじゃないかな。巡洋艦とかは少しだけ残して地上戦がメインになると思うよ」

部屋中央に地図を置いてそれを囲む形で三人が話し合っている。

「ハルナ様はいかが致しますか」

「アタシは……そうだね、残って支援でもするよ、まだミニガンの射手やってもらうからよろしくね」

そう言ってハルナが笑った。そうこうしているうちに山脈を越えて平野部に入った。穏やかな田園地帯といった雰囲気ですら風車も建っ

ている。そして、田園地帯には似合わないような施設が現れた。

「あれがこの近隣の基地の中心部でもあるローウェロア陸軍基地だよ」

それと同時に航空艇が次々に降下し始める。巡洋艦や駆逐艦は被害の大きい艦のみが高度を下げ始めそれ以外は高度を下げることなく航行していった。

「あの連中は何処へ向かってるんだ？」

「ここから結構東に行ったところに要塞都市があってそこで修理を受けるんじゃないかな。こちら辺で大規模な艦隊が集結できそうなのはあの街くらいだって言うし」

そう言いながらハルナが操縦席に座って自動操縦から手動操縦へと切り替える。航空艇専用のドックへ着陸させて外に出ることにした。整備や修理はここに所属するNPC達がしてくれるというので、彼らに任せることにした。

「ふう、やっと一段落できるね。はいコーヒー」

「おお、助かる」

「ありがとうございます」

ハルナが二人に缶コーヒーを投げて寄越した。ハルナがエイミーの整備のために作業場へと向かうと、することがなくなった二人は近くに設置された簡易ベンチでコーヒーを飲みながら周囲の状況を観察する。現在この基地にいるプレイヤーは四百人ほど、帝国軍の

NPCを含めても五百人弱しかない、おまけに魔導アーマーの数もこちら側が圧倒的に少ないと来ている。

「そういえば、マスターは職業ジョブチェンジ変更しないのですか？」

不意に蒼華がそんな事を尋ねてきた。

「そうだなあ、変更したいのは山々なんだがどの職業にしていいいかわからないんだよな……」

「マスターは確か錬金術のスキルもある程度取得していましたよね」

「ああ、錬金術師LV48だな」

「でしたら、錬装術師かパニッシャーはどうですか？私としてもそちらのほうがよさそうだと判断しますが」

「そうだな……この戦争が終わったらもう一度言ってくれ。忘れてるかもしれないから」

「Wil、でもマスターなら必ず覚えていてと思います」

蒼華が微笑みながらそういった。

「で、蒼華はこの状況をどう見る」

「さすがに五百人ちょっとであの聖十字騎士団と戦うには無理があるかと」

さっきとは打って変わって真剣な表情でニルヴァーナと蒼華が周

囲に聞こえないレベルの小さな声で話し合う。

「どのくらい持ちそうだ？」

「良くて三日」

「悪くて？」

「一日もかからないかと」

機械人形らしく冷静に告げる蒼華。その答えに安心するとニルヴアーナがハルナを呼んだ。

「どうしたの？」

「俺達はちょっと偵察に行ってくる。もしも場合はいつでも脱出できるようにしておいてくれ。俺達の方でそっちに合流するから」

「オッケー、気をつけてね」

一旦ハルナと別れてから二人は歩き始めた。基地の外は本当に穏やかな田園風景が広がっている。基地から一番近い村までの道を二人がゆっくりと歩いていく。

「穏やかですね」

「そうだな、戦争とは無縁そうだな」

黒服とメイドが一本道を歩いていくと小さな村が見えてきた。村

人は・・・遠くの方にある畑で農作業をしている最中だった。そんな光景を眺めながら更に歩いていく。小川が流れているのを眺めたり、蒼華が草原を走り回ったりと偵察に出たとは思えないほど自由に過ごしていた、彼女自身も嬉しそうに笑っている。彼女が小高い丘の上にある木の下で休んでいる間に彼は本来の仕事をすることにした。

「さて……時間的にはそろそろおいでになる頃だろうか」

ポーチから双眼鏡を取り出して山脈の方角を見ると・・・いた、聖十字騎士団の巡洋艦が5隻、輸送艦が3隻確認できた。おそらくは斥候も兼ねているのだろう。ここから見えるということはもう基地の方でも察知しているはずだ。

「蒼華、基地に戻るぞ……って寝てるのか」

蒼華に声をかけようと木の下を見ると、いつの間にか和風メイドは穏やかな顔で寝ている最中だった。機械人形は定期的にこうやってスリープモードに入ることがある。周囲や主人に脅威がないと判断した時にこうして寝るのだ。彼女自身もここ数日寝ていなかったのだろう。

「仕方ない、おぶっていか」

彼女を無碍に起こすのも悪いので、彼は寝ている蒼華を背負って丘を降り始めた。機械の体だが、フォービドゥンやティアマトーを振るうために上げた筋力値がこんなところで役に立つとは思わなかった。蒼華を背負って基地への帰り道を急ぐ、空は灰色の雲で覆われようとしていた。

第14話 小休止（後書き）

では、感想お待ちしております。

第15話 闘争と逃走（前書き）

第15話 闘争と逃走

ローウェロア陸軍基地 13…24

蒼華を背負って基地まで帰ってくると既に基地内は臨戦態勢だった。魔導アーマーが数騎、彼の頭上を飛び去っていく。そのほかのプレイヤー達も輸送艦に乗り込んでいる最中だった。

「ん……ここは」

「ようやく起きたか、ここは基地内だ。そろそろドンパチが始まりそうだから起こそうと思ってたんだ」

「ご迷惑をおかけしました。ハルナ様のところへ行きましょう」

「だな」

急ぎ足でハルナのところへ向かう二人、エイミーの格納されているドック前には既にハルナが待機していた。

「やっと来たね。アタシ達は上空から地上部隊の支援だってさ」

「了解」

「Wil」

短く答えてから3人はエイミーに乗り込んだ。エイミーが灰色の空の下へと飛び立つ。いよいよ雨が降り始めた。地上を前進するプ

レイヤー達は大変だろう、しばらく飛行すると敵の地上部隊の姿が見えてきた。魔導アーマーとプレイヤー、上空には航空艇を混ぜた配置だ。次第に互いの距離が狭くなってきている。雨の中で互いに相手の姿が見えてくると、ほぼ同時にプレイヤー達が走り出した。戦国時代の合戦のように草原でプレイヤー達が切り結ぶ。

それと同時に上空では魔導アーマーや航空艇の攻撃も始まった。ニルヴァーナのポジションは前回と同じミニガンの射手、蒼華はハルナのサポートだ。他の航空艇も次々に地上支援を始める。だが、敵は地上にいるプレイヤー達だけではない、魔導アーマーや航空艇もいる。突出しすぎた味方の航空艇が墜落した。草原に墜落して敵味方諸共爆発する。

「ハルナ、11時方向に敵の航空艇が近づいてくる！」

『了解！蒼華ちゃん、11時方向に魚雷発射！』

『Wil!』

エイミーから魚雷が放たれて敵の航空艇に真正面から直撃した、空中で敵の航空艇が爆炎とともに砕け散る。ニルヴァーナのミニガンが地上から迫る敵を的確に倒していくが、いかんせん相手の数が多い。聖十字騎士団の巡洋艦による攻撃も激化してきた。それと同時に味方の艦艇が沈められていく。

「ハルナは後退して基地の防衛にあたってくれ、俺はちょっと地上で暴れてくる」

『おっけー可能な限り高度は落としておいてあげる』

その言葉と同時にエイミーの高度が下がり始めた。それと同時に

ニルヴァーナがエイミーから降下する。エイミーが高度を上げて基地に戻ろうとしたときもう一つの影が降りてきた。

「私には命令が与えられていませんでしたので」

「……こうなった以上仕方がないな。征くぞ」

「Wil、露払いはお任せください」

「勢い余って全部食らいつくすなよ」

「生憎そんな下品なことはしません。一応メイドですので」

そんな軽口を叩きつつ二人が武器を抜いた。

「では、参りましょう」

その言葉と同時に二人が草原を駆けだした。二人の接近に気がついた神父の一人が手に持った剣で斬りかかるよりも早くティアマトの斬撃が神父を斬り飛ばした。蒼華も同じ様に敵を狩り始めている。大太刀の一撃で次々に聖十字騎士団側のプレイヤーが倒れていく。

最初は二人の参入に浮足立っていた聖十字騎士団だがすぐに態勢を立て直して攻撃を再開した。神父やシスターの数が減って代わりに鎧を纏ったプレイヤーたちが増えている。

だがそれに臆することなく二人が敵を切り裂いていく。ティアマトの一撃が接近していたクルセイダーのHPを削る、攻撃直後のニルヴァーナを狙っていたアーチャーが蒼華の大太刀の一撃でポリゴンと化した。

「おらおらおらあっ！どけえっ！！」

後ろのほうから声が聞こえてきたかと思うと数人のプレイヤーが道をあけた。そこに重鎧を纏い大型の盾をもったプレイヤーが現れる。

「見つけた！あんた知ってるぜ、碧衣の騎士団を壊滅させたメンバーの一人だろ。あんたを倒せば俺は有名になれるんだぜえっ！」

恐ろしく暑苦しいテンションで一人の男が現れた。だが、ニルヴァーナ本人はその口上を聞いている暇はなく接近している敵の対処に集中していた。相手にされなかったと感じたのか男が片手剣を振りかざしてニルヴァーナへと斬りかかろうとする。だが・・・。

「マスターには指一本触れさせません」

剣は届く前に大太刀で弾かれた。目の前に立っているのは和風メイド、こんな戦場には恐ろしく似合わない格好だった。

「機械人形を倒す趣味はないんだ。俺はただあいつと戦いたいだけなんだよっ！」

「それでもです、マスターと戦いたければまず私を倒してからにしないさい。最初に言っておきますが私はかなり強いですよ」

「ハッ、いかにも悪役の言いそうなセリフだな。いいぜ、お前なんか一分で片づけてやる！」

男がその一言と同時に蒼華へ斬りかかる、蒼華が罪華を構えて防

御の構えをとった。片手剣の一撃を

避けて、その隙に罪華で斬りかかる。蒼華が男の職業を推測する。
あれだけ防御力に特化した職業はBWOでは一つだけ、守護戦士だ。
压倒的な防御力でパーティーを守り、敵の注意を引きつけることに
長けた職業だ。

パラインと違うのは防御用スキルが多い点で、中には数十秒だけだが全てのダメージを無効化してしまうものもあるらしい。男は盾に絶対の自信があるのだろう、前に押し出して防ぐ構えを取った。だが……。

（その程度で防げると思っっているとは、片腹痛いですね）

蒼華が放った一撃が盾ごと男のHPを削った。まさか攻撃を食らうとは思っていなかったのだろう。男が後ろへ下がろうと防御態勢を解いた、だが蒼華がその隙を逃さず二撃目を叩き込んだ。蒼華の全力の攻撃は二発で守護騎士のHPすら削り取ってしまうらしい。男がポリゴンの欠片となって消え去った。

「今のあなたではマスターの足元にも及びません」

冷静にそう言って次のターゲットを狙おうとしたとき、彼女はメイド服の肩ところが切れているのに気が付いた。どうやら男が繰り出した最初の一撃がかすっていたらしい。

「大丈夫か、斬られたように見えただが」

「Wil、HPは削られていませんでしたので問題ありません。それとマスター、そろそろ戦線が崩壊しそうですね」

周囲の状況を確認しながら蒼華が言った。確かに突出しているのは自分達二人だけ、それ以外の兵士は基地のほうに後退してしまっている。

「よし、基地の方にズラかるか。ハルナに拾ってもらおう」

「Wil、では移動開始です」

蒼華の一言と同時に二人が全力で基地に向けて駆けだした。今まで鍛えた敏捷値のお陰で速く走ることが出来るが、それでも敵の相手をしながら逃げるといえるのは割としんどい。敵をある程度排除して一本道を全力疾走している最中、蒼華が話しかけてきた。

「想像より早く落ちましたね」

「半日とかからなかったからな」

「Wil、賭けは私の勝ちですね」

「賭けなんてやった記憶がないんだが」

「Wil、マスターには話してませんでしたから」

そんな会話を繰り返していると基地のフェンスが見えてきた。既に基地の中では抗戦する者はなく、巡洋艦や航空艇へ我先にと乗り込んでいる最中だった。

「ハルナ、今基地のフェンス近くだ。二人とも生きてる、迎えに来てくれ」

『おっけい、ちょっと待ってね』

インカムの向こうで銃声がしたが別に気にしない。しばらくするとエイミーがやってきた。甲板に飛び乗ると同時に急速上昇、最高速度で逃げ始めた。後ろでは味方の巡洋艦が敵に沈められて地上の基地施設につつこんだところだった。轟音と共に基地が炎に包まれる。だがそれを気にすることなく残存艦隊はその速度を上げた。ニルヴァーナも再びミニガンのグリップを掴み直す。爆炎の向こうから航空艇と魔導アーマーの姿が見え始めた。

「……休めるのはまだ先になりそうだな」

その直後、エイミーが更に速度を上げた。

第15話 闘争と逃走（後書き）

では、感想お待ちしております。

第16話 亡霊への宣戦布告

アルフェリア平原上空 14…33

基地から無事に飛び立つこと数時間、なんとか聖十字騎士団の追撃も振り切ることに成功し、円卓連合の艦隊はようやく戦闘態勢を解除した。ここまで必死にミニガンで迎撃していたニルヴァーナが操縦席へとやってくる。

「おかえり〜♪」

「おう、疲れたぜ……」

空いている椅子に座ってぐったりとなるニルヴァーナ。蒼華も空いている椅子に座った。操縦席近くの机には罪華と残月が置かれている。操縦席の横にある小窓から、外を眺めてみると脱出に成功した艇が集まってきている。あの基地から脱出できたのは駆逐艦12隻、巡洋艦5隻、フリゲート艦18隻、航空艇29隻だけだった。魔導アーマーは全損、艦艇もあの基地の到着した時の半分以下になっている。

「今度は何処に向かってるんだ？」

「今向かってるのは、帝国軍の中で二番目に大きい基地がある城塞都市ウィルシア。円卓連合の拠点でここが落とされるようなことがあれば……って、なんだろう、これ」

不意にレーダーマップになにかが映ったらしい。ハルナ自身が見に行こうとしたが代わりにニルヴァーナと蒼華が向かった。甲板の

上で周囲を見渡す。それらしい敵影は何処にも見えなかった。だが、蒼華が何かを感じ取ったらしい、断定するような口調でつぶやいた。

「来ます」

それと同時に近くを航行していた駆逐艦を一条の青白い光が貫いた。それと同時に駆逐艦のあちこちから火が出始めた。駆逐艦の高度が下がり地面に激突する。その煙の中から一騎の魔導アーマーが現れた。聖十字騎士団の主力騎ではない、どう考えてもワンオフ騎だ。騎体もスピットストームよりも一回り巨大で、武装もそれなりに危険そうな代物ばかりだった。そうしている内に二隻目が墜とされた。所属不明騎がこっちに迫ってきている中、蒼華がミニガンに取り付いた。そのまま所属不明騎に向けて銃撃する。それと同時に所属不明騎のコックピットが開いてそこから一人の少女が現れた。赤毛を侍ポニーテールにした少女で顔には好戦的な笑みが浮かんでいる。服装はミニスカメイド服、両腕は甲冑を近代化したようなパーツが装備されていた。それ以外の特徴は耳の部分が機械になっている。武器の傷から判断するに間違いなく手練れの機械人形だ。

「見つけたあ！」

嬉しそうに目の前に機械人形が言う。それと同時にニルヴァーナの前に蒼華が出た。

「マスター、下がっててください。あれの相手は私がします」

「へえ、角付きが相手なんだあゝ。すぐに死んじやいそうだねゝ」

「すぐ死ぬのはそっちの方です、あんまり舐めていると痛い目を見ますよ」

言葉の応酬が止んだと同時に二人が全力で前へ跳んだ。目に見えぬ速度で拳が繰り出される。そう広くない甲板の上で和服メイドとミニスカメイドが殴り合っている・・・これ以上ない奇妙な絵面だ。蒼華を狙ったミニスカメイドの拳が甲板に叩き込まれて甲板が拳の形に凹んだ。そこを狙って蒼華のローキックが飛んでくる。欄干にミニスカメイドが叩きつけられた。

「ふん……なかなかやるじゃない」

「だから言ったでしょう、私を甘く見ていると痛い目に遭うと」

「ま、いいや。じゃあ、今日はここら辺で勘弁してあげる」

それと同時にミニスカメイドの近くに所属不明騎が近づいてきた。コックピットが開いてそこに向けてミニスカメイドが飛び移る。コックピットが閉まると所属不明騎は近くにいた巡洋艦とフリゲート艦を一隻ずつ沈めてから遠くの方に飛び去っていった。

『大丈夫だった!?!』

インカムの向こうから心配そうなハルナの声が聞こえてきた。

「ああ、こっちはなんとか無事だ」

ハルナにそう返してとりあえず彼女を安心させる。

「蒼華、よくやった」

「……疲れました」

「機械だから疲れないんじゃないのか」

「私は人間に近い機械ですので、疲れもします、仮眠室まで運んでください」

その言葉で彼は蒼華が何を言っているかを理解した。蒼華はニルヴァーナに甘えているのだ。

「そうだな、お前はよくやった。だからこれは頑張ったお前に対するご褒美だ」

そう言ってニルヴァーナが蒼華を抱きかかえる。いわゆるお姫様だっこというやつだ。

「大丈夫ですかマスター、見栄張ってませんか？」

「大丈夫だ。昔から大剣を振ってきたからな、筋力値は結構あったりするんだよ」

「そうですか。なら安心です」

照れているのか少しだけ蒼華の顔が赤い。機械人形でも女の子は女の子なんだなと彼は密かにそう思った。

仮眠室のベッドに彼女を寝かせるとその脚で操縦席へと向かった。

「で、行き先はウィルシアに決定か、確かここを落とされたら……」

「そ、領土戦は円卓連合の負けで幕を閉じる」

エイミーは自動操縦で航行しているため、こうやって会議することが出来ている。二人のウィンドウにはウィルシアの地図が映し出されていた。周囲を山に囲まれ街そのものが一つの巨大な要塞となっている。現在、聖十字騎士団が占領している円卓連合の領地は全体の58%、ここを占領すれば聖十字騎士団の勝利が確定だ。

「蒼華ちゃんは？」

「仮眠室で寝てる」

「そっか、だったら今のうちに話しておくけれど。ニルは機械人形専用の武装があることを知ってる？」

唐突に話題が切り替わった。どうやら蒼華に関する話らしい。

「いや、初めて聞いた」

「じゃあ、簡単に説明しておくね……」

ハルナが話し始めたのは機械人形専用の武装、通称『デバイス』に関することだった。今彼らが向かっている要塞都市ウィルシアにはこのデバイスを製造することができる人物がいるという。そもそもデバイスとは機械人形が固有に持っている武装で同じものは一つとして存在しない。小さなものから巨大なものまで種類は様々、武器カテゴリーもバラバラという代物で、どんな物になるのかはその機械人形次第……ということなのだ。

「確かにこの状況じゃ逆転は無理にしても相手に手痛いしっぺ返し

を食らわすにはデバイスが必要だからな」

「そ、それと敵の情報なんだけどこれが敵の旗艦。で、これが相手のボス、こいつに見覚えは？」

「ないな、初めて見る顔だ」

映し出された旗艦とボスの姿を確認しておく。こいつを倒せば一発逆転だって夢ではない。

「そうだよね……じゃあこっちは？」

写真が切り替わったときニルヴァーナの表情が変わった。その写真に写っていたのは、かつて自分が復讐した少女……ミルティの姿だった。魔導アーマーを背に写っている写真もあった、その魔導アーマーは先刻襲撃してきた所属不明騎と同じ騎体だった。

「その顔……何か知ってるって顔だね」

「ああ、まさかこいつがいるとは……な」

ニルヴァーナがもう一度写真を見つめる。今のかれが在るのは、ある意味彼女の影響だ。だが……彼の中では既にこの事件は終わっていたはずだった。だが、過去の亡霊が今になって彼の目の前に現れた。忘れようとしても忘れることの出来ない悪夢。それが再び形を伴って彼の前に現れた。

「ハルナは『碧衣の旅団』襲撃事件は知ってるか？」

「うん、私はアップデート以前から参加してたからね。その事件も

よく覚えてるよ」

「俺は……あの事件の当事者だった。その事件で倒されたミルティを倒したのも俺だ」

何も言わずただ静かにニルヴァーナの話を聞くハルナ。

「……はじめは、つけた方がいいよな？」

「うん、つけた方がいい。もうニルは昔のままじゃないんでしょ？」

「ああ、違うな」

「だったらつけて来なよ。はじめをつけてくる位はアタシは付き合
つてあげるし、蒼華だって付き合ってくれるよ」

静かに言い切るハルナ。

「すまん」

「いいよ、あんたらと一緒にいたら面白いことも起きそうだしね」

「それじゃあ……改めてよろしく、ハルナ」

「うん、よろしく、ニルヴァーナ」

静かな操縦席で二人が握手を交わす。

「それじゃ……蒼華にも話してくる」

「行ってらっしゃい」

ハルナに見送られて彼は操縦席を後にする。その脚で蒼華が眠っている仮眠室へと足を運ぶ。

「どうしましたか、マスター」

「……起きてたのか」

仮眠室にはいると既に蒼華は起きていた。ベッドの上で正座している。

「何かを決めた顔ですね。何かあったのですか」

「ちょっと昔のことを思い出すことがあってな」

「そうですか……言っておきますが私はマスターの過去は知りません、知るつもりありません、聞いて欲しいと言って話してきても聞きません、過去に何をしてもマスターはマスターです。だから、そんな思い詰めた顔をしないで下さい。私は何があってもどんなときでもマスターの味方です」

長台詞を淡々と言う蒼華。その台詞を聞いた彼は蒼華に手を伸ばす。

「ありがたいな、蒼華」

「マスターらしくないですね。本当に大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

蒼華の手を握りながら彼はそう言った。

「えい」

その直後、彼の頭に蒼華のチョップが振り下ろされた。

「痛いな」

「Wil、痛くしましたから当たり前です」

蒼華の口調は至って冷静だが、彼女の顔はこの上なく楽しそうだった。

第16話 亡霊への宣戦布告（後書き）

では、感想お待ちしております。

第17話 戦闘準備

教室 12…57

昼休憩の教室で祐介は携帯端末を操作してBWOのをプレイしているプレイヤーのブログを流し読みしていた。何でもこのブログの筆者は領土戦で聖十字騎士団側で参加して昨日の戦闘にも参加していたという。最初のほうこそは普通にどんな相手だったとか、どんな武器を使っていた、ということが書かれていたのだが、途中から少しだけ戦況が変化したところから少し内容が変わってきた。

そのプレイヤーが最後に戦ったのは和風メイド服を着た女性で、自分の一瞬の隙についてHPをことごとく削って死に戻りすることになってしまったと締めくくられていた。

(ここに出てくる和服メイドって……まさかな)

脳裏に浮かぶのは自分の相棒として行動している和服メイドの姿が浮かぶ。そのブログをさらに読み進めていくと複数のスクリーンショットも載せられていた。

(……………どうしよう、否定できなくなった……………)

そのブログの筆者が最後に撮ったスクリーンショットに映っていたのは、和風メイド服の女性と黒衣に大剣を持った男……まぎれもなくニルヴァーナと蒼華の姿があった。

ウィルシア帝国軍基地 14・24

再びログインしたとき、BWO内の時間は時間は昼を少し回っていた。ニルヴァーナがログインした時は既にハルナはログイン済みで、蒼華とエイミーの操縦が変わった直後だった。

艦隊はようやく要塞都市ウィルシアに入港中で、彼らより先にこの街に入った艦はそのほとんどが修復を終えている。

更に別の方向からは60隻近い艦隊がこの街に集結しつつあった。要塞都市というだけあって街の周囲を守る防衛システムは恐ろしいほど強固で、街を囲むようにそびえ立つ城壁には巡洋艦の艦載砲が配置され、大型対空術式誘導弾の発射台や大口径の対空ガトリング砲も並んでいる。市街地も建物の屋上には対空砲や術式誘導弾発射機が装備されている。

「街一つが要塞そのものだな」

「Wil、それは言えてますね。今調べましたが、この街では一定以上の高さの建物には必ず対空迎撃システムの装備が義務づけられているそうです」

「徹底しすぎだろ……」

二人が甲板に立って眼下に広がる街を眺めながらそんなやりとりをしていた。確かに中央に密集している高層の建物には必ずと言っていいほど対空砲が装備されていた。

『お二人さん、もうすぐ基地に到着するってさ。どうする？市街地に出る？』

「ああ、例の店に案内してくれ」

『おっけい』

インカムから聞こえるハルナにそう返すと再び真下に広がる光景を眺めた。大型陸港には巡洋艦や駆逐艦が次々と入港しつつある。なかなか壮観な光景だ。

「ところでマスター、さっきの会話にあった例の店とは？」

「お前が寝てる間にハルナから聞いた話だ。『デバイス』のことは知ってるな？」

「Wil、私たちの専用武装のことですね。この街にあるのですか？」

「ハルナの話だとそうらしい。ついでに俺も職業変更ジョブチェンジしてくるかな」

そう言ってニルヴァーナが大きく伸びをした。

「結局なさるのですか、職業は？」

「パニッシャーだ。一応あれもいくつか武器装備できるだろ」

彼が言ったパニッシャーとは上級職業の中で1位2位を争う不人気職で、複数の武器やその他のスキルなど恩恵も多いが成長速度がかなり遅いので、それが不人気の原因ともなっている。それに複数の武器が使えなくとも基本的にパーティー内で前衛、後衛、回復などの役割分担があるため複数の武器を切り替えるメリットはない、そのため必然的にこの手合いの職業はソロプレイヤー向けとも言える。それが更にこの職業の不人気に拍車をかけていた。

「Wil、確かあの職業はあと一つ武器が装備できましたが……武器は？」

「双銃だ」

「Wil、スキルは取得済みのようですね」

蒼華が確かめるように訊ねてくる。

「剣は練成できるし魔法使ってガラでもないからな……そろそろ着陸だ。行くぞ」

「Wil、どんな武器が出てくるのか楽しみです」

やっぱり自分専用武器が楽しみなのだろう。蒼華がそんなことをつぶやいた。基地に到着した艦隊は最初に補給と整備を受けた。それから自由時間となり、エイミーがドックに運ばれるのを見届けるとハルナの案内の元、二人はウィルシアの街に繰り出した。

要塞都市といわれてはいるが、街自体それほど軍事色は強くなく、何処に出もあるような普通の近代的な都市だった。ハルナに案内されてやってきたのは『メリーの機械人形工房 ウィルシア本店』という店だった。どこかアンティークショップのような趣を感じさせる外観で店の外には数人の機械人形が立っている。

「この店だよ」

ハルナが扉を押し開けるとカランカランと入店を知らせるベルが鳴った。数分後店の奥から一人の老婆が現れた。

「おや、ハルナちゃん。お客さんかえ？」

「あ、おばあちゃん。そうだよ、この黒い人の隣に立ってる娘が今日のお客さんだよ」

「そうかえ、初めまして。わたしやこのハルナの親代わりをしているメリーです。よろしく」

目の前の老婆がそう言ってお辞儀をした。それにつられて二人もお辞儀する。

「ニルヴァーナです。どうぞお見知りおきを」

「初めまして、蒼華です」

「蒼華ちゃんかえ、こっちおいで」

「Wil、では行ってきますマスター」

そう言って店の奥に蒼華が消えていく。手近な椅子に座って窓の外に広がっている風景に目をやった。

「はい、紅茶。作業は一時間ほどかかるんだって」

「そうか、じゃあその間に俺もやることを済ませてくるとするか」

ニルヴァーナが店の中を見渡しながらいった。

「意外と物が少ないな」

「ここが戦争の舞台になるからね、店の施設も殆どが移設済みだよ」

「なるほどな、それじゃ行ってくるわ」

店の扉を押し開けて外に出た。頭の上を駆逐艦が三隻通り過ぎていく。移動手段を探すのが面倒だったので地図を見ながら職業変更所を探す。数分後、無事に職業変更を終えてパニッシャーになったニルヴァーナは街の中を歩いていた。

一時間までまだ結構ある。街の中を眺めて時間を潰すのも悪くはない、道具屋や武器屋を見て回ったりして時間を潰した。予定の時間になったので店に戻ると同時に店の奥からメリーと蒼華が出てきた。

「どうだった、おばあちゃん」

「この娘は面白いねえ、どうだい蒼華ちゃん、具合は悪くないかえ？」

「Wil、問題ありません。ありがとうございますメリー様」

礼儀正しくメリーにお辞儀する蒼華。そしてニルヴァーナの方に振り向くと自分のステータスウィンドウを開いた。

「その娘用のデバイスはまだ開発中でね、もうしばらくかかるよ。それとその娘の新しいスキルはその二つだよ」

蒼華がステータスウィンドウの画面を操作してスキル欄を彼に見せる。彼女がこれまで取得していたのは重力制御と片手剣、長剣用のソードスキルだけだったが、今はそこに新たなスキルが加わっている。『オブジェクト武装化』と『システムハッキングLv5』の

二つだ。

「オブジェクト武装化は街のあちこちにある物を錬成して自分の武器にしようってスキルだよ、システムハッキングは蒼華ちゃんを中心に様々な武器の制御が可能になるってスキル、オンラインで繋がってなければ機能しないという制限付きだけど、その気になればこの街の防衛システムを乗っ取ることだって可能な代物だよ、デバイスなしでも充分強いね」

「確かにこれはすごいな……」

スキル欄を眺めながらニルヴァーナがそうつぶやく。

「それとニルヴァーナさんには悪いけど蒼華ちゃんにはある武装のテストもしてもらうことにしたさね」

「ある武装……ですか」

「本来なら許可を取るべきなんだけどねえ……」

「Wil、マスターなら許可してくれるだろうということで搭載してもらいました」

そう言いつつ蒼華がくるっと一回転する。背中の腰の部分に見慣れない黒色のパーツが装備されていた。そしてその周囲には四つの柄らしき物が出ている。

「これは？」

「今開発してる機械人形専用装備の一つでね、武装名称『蒼焰』。

複数の武器を持ち歩くのは面倒だから術式を応用して別の場所にある武装を一瞬で呼び出せるようにした装備だよ、ガンスリンガーには『異空弾倉』というスキルがあるのはご存じかえ？」

今メリーが言った異空弾倉とはガンスリンガーのスキルの一つで、弾丸がなくなると専用の術式を展開して異空にある弾倉から補給を受けるというスキルだ。このスキルがあればマガジンチェンジしている時間を短くできるし、予備弾倉でアイテム欄を埋めてしまうこともないので、銃を使う職業に就いているプレイヤーには必須のスキルでもある。

「この娘の背中についているのはその武器版みたいなところだよ、で、これはその試作型、試しに蒼華ちゃん、展開してみて頂戴」

メリーがそう言うと同時に蒼華の背中の一つを中心に左右四つずつ、計八つの武装ホルダーが現れた。

どのホルダーにも既に武装が装備されている。そして腰の部分に差している柄らしきパーツを引き

抜くと、それもやはり武器だったようで青白く輝く刀身を持った短刀だった。

「こうやって、異空弾倉の技術を応用しても格納できるのは九つが限界だよ、背中に刺さっている短刀も蒼焔の一部だから、全部で十三の武器を持っていることになる。製品版ではいくつかホルダーを外すからもうちょっと少なくなるけど……、あ、蒼華ちゃん、もう仕舞ってくれても大丈夫だよ」

メリーが蒼華にホルダーを仕舞うように促す。いつの間にか四本の短刀で器用にジャグリングをしていた蒼華がホルダーを引っ込めた。短刀も綺麗にキャッチして腰のパーツに戻す。

「Wil、どうですか、マスター」

「うん、いいんじゃないか。蒼華自身は何ともないな？」

「Wil、問題ありません」

「じゃあ、大丈夫ですよメリーさん。代金はいくらくらいです？」

「いえいえ、お礼なんてとんでもない。家の娘の友人になってくれたばかりか試作型のテストも行ってもらうのに代金を取るなんて出来ないね」

にこやかに彼女が言った。そして店を出ようとしたとき、ニルヴアーナのみが引き留められた。

「どうしたんです、メリーさん」

「さっき、あの娘のデータを調べてみたらこんなデータが出たんだよ」

システムウィンドウとは別のウィンドウが浮かんできた。そこに表示されていたのは何かの波形、どうやら何かのデータらしい。

「これは？」

「蒼華ちゃんデータだよ。本当に人間みたいな行動をしているからねえ、少し気になったんだよ。ほら、外で家の娘達が待ってるんだから早く言っておやり。それと、家の娘を頼んだよ」

「はい、お任せください」

店の扉を開けて外に出るニルヴァーナ。外にはハルナと蒼華が待っていた。二人と合流して基地へと戻っていく。どうやら基地で緊急のブリーフィングがあるらしいとのことだった。三人が基地への道を走る。この領土戦の勝敗を決める戦いが、いよいよ幕を開けようとしていた。

第17話 戦闘準備（後書き）

蒼華の能力、割とすごい件について。今回から装備された。蒼華専用のウェポンユニット『蒼焰』のイメージはファンタシースターポータブル2の登場キャラクターの一人、シズルがゲーム内やムービーパートで使っていたものを参考にしています。

画像も近いうちに活動報告か次回の前書きにでも張れるように見つけてきますので、よろしくお願いします。それでは、感想お待ちしております。

第18話 真夜中の艦隊戦（前書き）

蒼華のスキルを見るがいい！！

第18話 真夜中の艦隊戦

ウィルシア基地 第2ブリーフィング室 02・36

ブリーフィングで伝えられたのは聖十字騎士団の全兵力がこの街に向かってきているという。偵察に送った魔導アーマーは全騎の通信が途絶え街の外で監視に当たらせていた艦隊も全て音信不通になっていた。この情報を受けてウィルシアは街全域が迎撃形態へと移行。街のあちこちに武装が展開している。

他にも周囲の山を改造して作った迎撃システムは全てがオンラインになっている。街だけではなく街の周囲まで要塞化しているとは思わなかった。ブリーフィングが行われている演壇の隣では水晶玉がウィルシアの街とその周囲数キロメートル内の地図を表示している。市街の近くの山には必ず何らかの兵器のマークがあった。

現在、聖十字騎士団は艦隊を三つに分けて街に攻め込む準備を整えている。噂だが聖十字騎士団が投入している兵力はNPC兵も含めると五桁近くになるらしい。そこまでの兵力が一斉にこの街に雪崩れ込むように侵攻してきていると若干気が遠くなるが思考を切り替えてブリーフィングに集中する。

今のところ一次防衛線は突破されていないと指揮官らしいプレイヤーが説明していたが、慌ただしく一人の兵士がブリーフィングが行われている建物に駆け込んできた。あの慌て様から察するに、どうやら一次防衛線は突破されたらしい。ブリーフィングは即時終了、基地に待機している全ての部隊は直ちに出击せよ、とのされた命令が下された。エイミーに乗り込んで出击の合図を待つ三人。待っている間にも次々と大型艦が発進していくのが見える。数十分後ようやく彼らに出击の命令が下された。エイミーが送られたのは三方向

の中でも最も攻撃の激しい地区だった。

「ハルナ、くれぐれも誤射はするなよ」

『その辺は大丈夫だって』

『マスターも無茶しないでください。ここまで暗いと私でも探すのは困難です。飛び降りたら探しきれません』

「了解だ。今回はきっちりミニガンの射手をやってるよ」

そう二人に伝えて意識を戦闘に集中させる。夜間戦も想定していたのか航空艇の射手や地上部隊には暗視装置が支給されていた。

（円卓連合も随分と羽振りがいいな）

そんなことを考えつつ頭に暗視装置を装備する。視界が狭くなってしまうのだが、無いよりは遙かにマシなので文句は言わない。現在、戦闘は山間部での航空艦同士の戦闘が中心に行われている。夜空には花火が輝いているがもちろん本物の花火ではない。砲撃や爆発が起す汚い花火だ。エイミーなどの航空艇が敵の対空砲火をかいくぐって次々と敵艦を沈めていく。巡洋艦などの大型艦は衝突を回避するために標識灯がつけられている。戦闘時には敵に位置がばれてしまったため消すのが基本なのだが、乱戦状態に陥ると味方同士で衝突することがよくあるので、規則を無視して点けている艦がほとんどだ。それが裏目に出て目印になってしまっているため暗視装置が無くても大体の位置が分かる。ハルナがまた駆逐艦に航空魚雷を叩き込んだ。機関部に直撃したため盛大に炎を上げながら高度を下げていく駆逐艦。

途中で出撃する羽目になってしまったが、どうやら聖十字騎士団はウィルシアを包囲するつもりでいるらしい、艦隊を三つに分けて三方向から侵攻しているところからみてもそう考えるのが妥当だ。そうでなければ戦力の分散はあまりベストとは言えない。ウィルシアが完全に包囲されてしまえば、円卓連合は籠城戦を余儀なくされ、物資が枯渇してしまう。だがその反面、攻城戦では攻撃側も戦力を消耗するので本来ならば自軍の損害を減らすため事前の偵察が必要であったのだが、敵はウィルシアの地形を把握していない状態で乗り込んできた。

緒戦で勝った驕りでまともに偵察しようという案が浮かばなかったらしい、街は要塞化していることは領土戦が始まる前に分かっていたが、まさか周囲の山まで要塞化しているとは思わなかったのも、それも円卓連合の損害が拡大する一因ともなっている。だが、相手の物量は多かった。損失を埋められるほどの兵力が次々の投入されていく。

『このままじゃキリがないよ!』

「このどこかに艦隊を指揮する艦がいるはずだ、そいつを沈めれば結構楽になるんじゃないかと思うんだが」

『それはある意味名案だね、とりあえず他の連中に打診してみるよ!』

ハルナとそんなやりとりをしながらも彼はひたすらミニガンを撃ちまくる。エイミーもかなり被弾痕が増えてきた。ハルナでも反応しきれない量の砲弾が飛び交っているということだ。

『他の連中から通信が来たよ！やってくれるって！！』

「見当はついてるのか！？」

『今アタシ達がいる空域から少し行ったところに巡洋艦三隻に守られた空母がいるの。多分その空母が指揮を執ってるんじゃないかって思うの！！』

「了解だ。従うぜ艇長！！」

『任せて！』

ハルナの言葉と同時にエイミーが急降下、それに従って数隻の航空艇と数隻の艦が進路を変えた。確かにハルナのいうとおり空母がいた。艦載騎は全て出払っているらしく残っているのは空母に搭載された近接用の対空砲しか残っていない。

巡洋艦の射撃をかわしてエイミーが巡洋艦の艦橋に魚雷を撃ち込んだ。それに続くかのように航空艇が機動力で巡洋艦を翻弄、あっさりと沈めていった。巡洋艦も艦対艦大型術式誘導弾で援護をする。だが空母まであと少しというところで魔導アーマーが出てきた。手に持った短銃で威嚇射撃を繰り返している。どうやら艦内で補給中の騎体を出してきたらしい。

「蒼華、出来ればいいからハッキングを掛けてみてくれ」

ニルヴァーナが一つの策を思いついた。

『どの艦にハッキングを掛けるのですか？』

「三隻の内でもまだブリッジを潰されていない艦があるはずだ。そいつに仕掛けてみてくれ、できそうか？」

『オンラインになっていない可能性もゼロとは言い切れませんよ？』

「他の艦と戦闘情報を共有するために相互リンクは必ず開いてるんだよ。そこにつけ込んでくれ」

『Wil、お任せ下さい』

「ハルナ、今から蒼華がハッキングを仕掛ける。サポートが無くなるが大丈夫だよな！？」

『大丈夫だよ！』

通信からしばらくすると生き残っていた敵の巡洋艦に変化が起きた。艦が回頭し始めたのだ。それに伴い味方の巡洋艦に向けて攻撃していた砲撃も停止する。そして敵の巡洋艦はスピードを上げながら空母の方に突撃していく。

先に空母に接近していた航空艇が次々に魚雷を撃ち込むと同時に蒼華によって完全に制御された巡洋艦の武装が一斉に空母に向けて放たれた。空母の船体に爆発が起き始める。そして艦の後方で巨大な爆発・・・空母内の弾薬庫が誘爆を起こした。これが決定打になったのだが空母はまだ動いていたので巡洋艦を体当たりさせる。味方であるはずの巡洋艦に特攻されて空母は一際まばゆい光と共に爆発炎上した。

「蒼華、大丈夫か」

『Wil、上手く行ったみたいで何よりです』

「これは蒼華の戦果だ、誇っていいぞ」

『ありがとうございます……ございます』

褒められたのにどこか釈然としない返事を返す蒼華。本当にこうしてみるとプレイヤーと何ら区別がつかない。冗談を返し、毒舌を吐き、嬉しそうに笑う、本当にプレイヤーのようだ。

通信が切れると同時に朝日が昇り始めた。撤退していく艦隊に向けて次々と術式誘導弾が命中する。この領土戦が始まってから円卓連合初めての勝利だった。三人が戦闘を終えて基地へと帰還する。だが、基地内は出撃する前よりも慌ただしかった。エイミーから降りてきた蒼華が話しかけてくる。

「何かあったのでしょうか」

「浮かれてる……ってわけでもなさそうだ」

近くを通りかかったプレイヤーに聞いてみると、侵攻していた三方向の内、二つは押し返すことに成功したものの残りの一つは三次防衛線が突破、急いで四次防衛線が構築されたが為す術無く突破されてしまった。山の迎撃システムも全てが破壊され、現在は最終防衛ラインでの攻防が続いている最中だという。

「想像以上に拙い状況になってるな」

「Wil、確かに危険な状態ですね」

話している二人の上を数十騎の魔導アーマーが飛翔していく。そ

れを見送った後、二人は整備場でエイミーの整備をしているハルナのところへと足を運んだ。街での戦闘が決定的になった今、エイミーは被弾箇所の修復と同時に攻撃航空艇への改装が進んでいた。機首には主砲の他に大型機関砲が搭載され、航空魚雷発射管は左右合わせて二つだったのが、左右合わせて八基になっている。

他にも空対地術式誘導弾発射機や空対地無誘導術式弾発射機を装備したエイミーはかなり凶悪な姿になっていた。大量の武装を積んだ重量で通常のエンジンなら機動力が落ちてしまうところだが、今回エイミーには円卓連合が製造している新型のエンジンと換装してもらうことになった。それを聞いてハルナが「円卓連合も気がいいね」といって大笑いしていたのを覚えている。

そして数時間後、ある程度は想像していた事態が起きた。ついに最終防衛ラインが突破、聖十字騎士団の軍勢がこの街に王手をかけてきたのだ。

第18話 真夜中の艦隊戦（後書き）

第一章もクライマックス目前!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3996y/>

黒衣の剣士と和服メイドのオンライン戦記

2011年11月29日13時48分発行